

---

# 嘘と不思議とオブジェクト

奈屋一郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嘘と不思議とオブリジェクト

### 【Nコード】

N3110S

### 【作者名】

奈屋一郎

### 【あらすじ】

自称異星人な彼と恐らく異星人な彼女の物語

## 第一章 羽田恵那

私の好きな方は宇宙人です。

そのようなことを言うと、大抵の人は頭が悪くてどこかおかしな女だと思つたのでしようけれど、彼自身がそう証言しているので、その言葉を一年間保留しているのです。

私とその彼、白井優と出会ったのは高校の入学式でした。

春爛漫という言葉通りの穏やかな気候の元で行われた入学式が終わり、教室で一年を過ごす級友と初の顔合わせが行われました。私も含め、皆の表情はどこか堅いのですが期待に溢れた眼は輝いてみえます。生徒の緊張を和らげる為に、担任はの名前の昇順に自己紹介をするよう指示しました。

最低限これだけは言うようにと担任が言い、黒板には名前、出身中学、趣味、得意教科、不得意教科が書かれます。

たったこれだけのことですが、緊張のせいか話の途中で噛んでしまふ人、声が小さくて聴き取りにくい人、何を言うのかど忘れした人、長く話しすぎて担任に途中で終わらされる人、見事な話術で教室の空気を暖める人、一分少々の情報しか得られなくてもそれぞれ十人十色です。私も何か気の利いた事を言えないかと思案していると、とんでもない言葉が右耳の鼓膜を揺らしました。

「俺は異星人だ」

徐々に暖まってきた空気が音速で固まり、皆の視線は白井くんに向かれます。

初顔合わせの自己紹介ではありえないような爆弾発言をした彼の表情には、冗談という雰囲気は全くなく、さも当然と言いたい様な強い眼で、正面の担任を見ていました。

それだけ言つて白井くんは座り、憂鬱そうに時計を眺めました。

冬の早朝のように空気は冷えたままで、帰りたいのは私達の方だよ、と言いたい気持ちを抑えます。窓際の人が春の穏やかな空気を

入れて換気してくれればと思いましたが、きよとんと白井くんを見つめるのみ。

そうしてしばらくの沈黙の後、ぼうつとしていた白井くんの後ろの席の人が担任に声をかけられ、自己紹介は再開したのでした。

という具合の初対面だったので、白井くんに対して好意など抱くはずはなく、せっかくの入学式気分を崩壊させてなんたる愚行、などという怒りの気持ちが強かったので、この頃は今の私の心理状態など想像もしていませんでした。

それがいつ辺りから変わったのか明確な判断は出来ませんが、恐らくあの辺りだと思えます。

入学初日で花の高校生活に幕を閉じた白井くんは、宇宙人というレッテルを剥がせば不良生徒というレッテルが隠れていそうなくらい、それはそれは不真面目な生活を送っていました。遅刻早退は当たり前。授業途中に教室から抜け出しサボタージユなんて事も行っていました。そして先生から注意を受けると、決まって「地球人のお前に関係ない」と言うのです。

先生に歯向かう事や授業に出席しないことは、私にとっては考えられない事で、それが衝撃的だったのか私はよく白井くんの夢を見ました。別に何か特別な内容ではなく、ただ学校で起こった出来事の焼き回しの様なものを、何度も何度も見るのです。

そのことを小学校からの同級生で友人の織恵さんに相談したのですが、彼女はこう断言したのでした。

「恵那ちゃんが白井を好きだからでしょ」

そんなわけがないとすぐに否定をしましたが、心臓はとくんとくんと激しく収縮運動を繰り返し、心と体がかみ合っていない事に気が付きました。そして織恵さんは意味深な事を言うのでした。

「もし明日、白井の夢を見なければ好きじゃないかもしれないけどね」

次の日の朝、私は織恵さんの前に少し鼻息を荒くさせ、堂々と腰に手を当て、少し股を開き、開口一番に言ってやりました。

「織恵さん、やっぱり白井くんの夢は見ませんでした、ということ  
は私が白井くんを好きでないと言う事ですね！」

そうです。私はあのような異質な男性の事を好きになるはずがないのです。ただ、印象が強すぎてついつい私の夢に多く出てきただけ。いつも機嫌の悪い人が優しくしてくれると通常よりも印象が良くなってしまうあれと似ているのです。だから決して好いていると言うわけでは断じてないのです。

それを実感した私は教室の端の方で椅子に座り外を眺める白井くんの方を向き、鼻で笑ったのでした。

……………という夢を見てから、私は白井くんを意識しない日々がありませんでした。織恵さんの言葉を意識し過ぎ、彼女の思惑通り？夢を見てしまった私は、更に白井くんの一挙一動に視線を奪われ、体温を変動させられ、心臓の自由を蔑ろにされる一年を過ごしたのでした。

そして今日、キリスト教徒にとって最も聖なる日がやってきました。

熱心なキリスト教徒は自宅からほとんど出ずに家族と過ごすそうですが、日本にはそのような方は稀なので、文化の違いで恋人や友人と過ごす方が多いと聞きます。

私は是非とも恋人…………つまり好きな方と過ごしたいのですが、まだまだそのような関係には至っていません。思い返せば彼との会話は、入学式から一週間程立った頃の一度だけな気がします。

「単刀直入に聞くけれど本当に白井くんは宇宙人？」

「宇宙人ではない」

「では、やっぱり冗談のつもりで？」

「はあ？ 違う。宇宙人ではなく異星人だ」

「はあ？」

「宇宙人だとこの星に住む人類も宇宙人と言える。だから俺は違う星から来た異星人だ」

概ねそのような発言だったと記憶しています。その時の白井くんがあまりに不機嫌な表情をしてぶっきらぼうな言い草なので、以来話す勇気を出せずじまい。

けれど、勇気をしまい続けるのは勿体無く、胸の柵から出す機会が、本日、クリスマスにしかないと私の直感と世間が言っています。本日の白井くんの行動は把握済みなのですが、私にはその前に乗り越えねばならない事があります。それは……、

「ねね、恵那ちゃん。今日の夜は七時からだって」

「あ、そ、そそうなの？」

放課後で皆が帰る用意などをしていて慌ただしい中、背後から織恵さんに唐突に声をかけられ、思わず取り乱してしまいます。

「どうかした？」

「えっと、それは……ね」

先週から約束されていた、クラスメイトで行うクリスマス会の参加を取りやめするなんて、そのような粹から外れた事をする勇氣など私にはないのです。

「もしかしてクリスマス会、来れない？ 塾で忙しい？」

「えっと、はい、まあ」

うそです、大うそです。何を柵からぼたもち的な織恵さんの発言に安堵して話を合わせているのでしょうか。

「じゃあ仕方ないや。恵那ちゃんの家、親が厳しいもんね。恵那ちゃんがいけないのは寂しいけど」

と言つて、伏し目になり切なそうにした織恵さんでしたが、すぐに温かい笑顔を向け「行けなくて嫌なのは恵那ちゃんだもんね、ごめん。勉強頑張つてね」と小さく手を振り、私の席から離れて行きました。このままではいけない、そう思った私は咄嗟に織恵さんのブレザーの袖を引っ張ってしまいました。

突然の事に驚いた織恵さんはハテナを浮かべた様な表情で私を見つめます。

「うそなの」

「何が？」

「えっと、クリスマス会にいけない理由は塾ではなく……」

「家族と予定でも？」

せつかちな織恵さんは、私の言葉の途中でちよこちよここと質問を入れてきます。少々面倒です。

「それも違います。えっと、言いにくいのですが……夜は山に行くのかと」

「もしかして山って……白井？」

こくりと頷くと、織恵さんはやにやとした嫌らしい笑顔を向けてきました。

「付き合っちゃったわけかー」

「いえ、そうではなくて、ただ……」

「ただ？」

「……一緒に………過ぎたい……だけ」

頬がみるみる間に赤くなり、脈を張り裂けさせる程に心臓は血液を送り続けます。自分は今、どのような表情をしているのだろうと思つと途端に怖くなり、頬を手で押さえ顔を隠すと、織恵さんは小さく、くすくすと笑いはじめました。

「そういうことなら仕方ない。あたし達も楽しんでくるから、恵那ちゃんもいいクリスマスになるといいね」

そういうと再び小さく手を振り、「報告のメールしてね」と言つて、教壇の周りで集まっているクラスメイトの輪の中に入って行きました。

「白井に用かい？」

織恵ちゃんと入れ替わりで話しかけてくれたのは寺内くんです。

いつも飄々としていて、ぎよろりとした魚の様な目は特徴があります。

「別に用はないけれど？」

「そうかい。ならいい。奴ならいつもと同じく旧図書室でいるだろう」

彼は白井くんとは違った異質な部分を持っています。その一つはこの様に全く人の話を聞かず会話が一方通行だからなのです。そしてもう一つ。噂に聞いたのですが、彼はこの高校の、いや、町のありとあらゆる情報を集めており、その対価に金銭を得ているそうです。それで白井くんに詳しいのでしょう。

「はあ、そうですか、ご親切にどうも」

上辺だけのお礼を言い、私はカバンを持ちマフラーを巻き、そそくさと教室を出て旧図書室に向かいました。昼から始まる塾に行く為の気力を貰いに行くのです。

ようはがんばくがんばく。

## 第一章 白井優

俺は異星人だ。

放課後の旧図書館。廊下側の窓から視線を感じる度に、その言葉を思い返す。

その言葉を発した理由はたった一つ。自己紹介に耳を傾けず考え事をしていたからだ。UFOの映像を撮る方法を。

未確認飛行物体。それに対し、俺は人以上の思い入れは無い。なのに、何故そんな映像が必要かと言うと、弟が誕生日プレゼントに欲しいと言うのだ。弟がそう言ったのは四歳の誕生日だから俺が中学三年生の頃だ。

そして結局、当たり前だが入手する事などで出来ず、UFOのラジコンをあげたのだが、その場で粉砕され、その日から山に行つてUFOを撮ろうと頑張っているのだ。

そんな日々を過ごしているうちに俺の頭はおかしくなり、いつそ俺が異星人になればUFOは姿を現すのでは？ という意味不明な結論を抱いていた。それがぽつと、ふいに口に出してしまったのがあの自己紹介だったのだ。

正直に言うと、俺は誰かの突っ込みを待っていたし、教師からの注意を受けたがっていた。けれど、何故か思っていたよりも連中はこのような事態に免疫が無いらしく、俺も「なんちって」などとおどける事も出来ず、何事も無かったかの様に席に着いたのだった。

入学式の自己紹介から数週間は注目を浴びていた。浴びすぎてストレスが溜まり、胃がしくしくと泣くようなじつくりとした痛みを抱える程だった。そこで逃げ場に使ったのが旧図書室だった。

誰も読まない、読まれなくなった本を置いた、誰も使用しない旧図書室。教室より少し大きく、本棚が部屋の三分の二を埋めていて、残ったスペースにガストーブと傷だらけで所々綿が出ているソファが置かれている。

そんな所で休み時間と放課後に非難していると、俺に対する『おまえ異星人だろ視線』は無くなっていった。それは徐々に。あめ玉が溶けるように。

白井優は異星人であるという事が校内で当たり前になってからは誰にも接されず、接しない学園生活を送って来られた。

それがいいのか悪いのか良くわからないが、概ねいいように感じる。

誰に非難されるわけではなく、傷をつけられるわけでもない何も無い日々。適当に授業を受けて、放課後はほこりまみれの旧図書室で読書に耽る。悪くない。

ただ、たまに活字に集中できず、秒針の音に耳をすませていると思う事がある。

この学校の何人くらいが俺を異星人だと思っているだろうか？

正直、1%くらいの確率だろう。この町の学校でなければ限りなく0だが。というのも、俺が通うこの高校は、石河県の白衣市にある。場所で言えば能都半島の付け根辺りだろう。

そこは『そうはちぼん伝説』という伝説の舞台となった町で、未確認飛行物体に興味がある奴に知られている。かいつまんでその伝説を説明すると、昔々、白衣にある尾錠山ではそうはちぼんに似た光が度々目撃された、という話だ。そうはちぼんとは仏具で、シンバルの様な形をしている。一般的に認知されている円盤型のUFOとシンバルの形状は似ている。だからそうはちぼん状の光はUFOだったのだ！と言われていて、この町の村おこしにもUFOは使われることになり、UFOの町として知られるようになったのだ。そのお陰で町には宇宙博物館という珍しい物もある。今思えば、なまじUFOと関わりが深い町だから、あの自己紹介で微妙な空気になったのかもしれない。

という理由で百人に一人は俺が異星人だと信じている奴がいるのではないかと思う。いや、……それだけではない。流行が過ぎた<sup>とこのもなんだが</sup>と言っのに、一週間に一度くらい、旧図書室を覗きにくる奴がいるの

だ。もしかして観察しようとしているのかもしれない。そんな馬鹿な奴がいるわけない。と、思いつつも窓の方に視線を送る。

………いつも通り誰もいない。隠れているのかもしれないのでトイレついでに俺は部屋から出て周囲を確認する事にした。すると曲がり角でひらりとゆれるスカートが一瞬見えた。

やはり誰かが覗きにきている。けれど今から追いかけた所で追いつけるわけもなく、後ろ姿の彼女が誰なのか特定する事など難しいので、素直にトイレに向かった。

そして用を足し旧図書室に戻ると、ソファで文庫本を読む寺内がいた。

「これはこれは、異星人ではないか」

そういつて憎たらしい笑顔を浮かべる寺内は、何故か俺に付きまといってくる変な奴だ。休み時間、放課後、自由気ままにこの部屋にやってきて、空いたソファに座り哲学書や明治時代の文豪の書籍を読んでいる。わざわざこの部屋に来る意味がわからない。だから俺はいつも不機嫌に彼を迎えている。

「おやおや、異星人。君に話しかけているのだけれど。まあ、無視をするのはいつものことか」

わざとらしく音を立てて本を閉じ、部屋を出る準備を始めた。

「そうそう、君に言う事があった。今日の夜はいつもの様に山に行くのか？ まあ、答えてはくれないか。うん、行けばいい」

寺内の顔はいつもより嫌らしく、不敵で、苦虫を噛み潰す様な笑顔と言えはいいのだろうか。とにかく気色悪く、その表情は焦げ目の様に頭にこびりついた。

## 第二章 羽田恵那

かちやかちやくちやくちや。

フォークとスプーンが皿に触れ合う音と咀嚼する音だけがリビングに響きます。

塾が終わって家についても安らぐ事はありません。

ドラマで見かける様なテレビを付け、一家団欒で笑顔を浮かべる夕食なんてこの羽田家にはありえないのです。

お母さんはサラダに手を伸ばしつつも、ちらちらと私に視線を向けます。もし少しでも間違った食器の使い方、行儀の悪い作法をすると注意の言葉が飛んでくるのです。けれど、私の隣で座り、このリビングを響かせる音の八割を発しながら食事をする姉さんには注意しません。片膝を立てても、スパゲティをすすっても、フォークをサラダに突き刺したままにしてもです。

母さんが姉さんに何も言わなくなったのは大学受験を失敗した辺りからです。そしてその分、私は厳しくしつけをされて育ちました。お母さんと私の食事が終わると、お母さんは通知表について話し始めました。私の隣にはまだ、ポタージュスープをすすりながら携帯電話を眺めると姉さんがいます。

「二学期の成績についてだけれど、全て十だからと言って満足しない事。学校で一番だとしてもね。塾で全国試験が行われたでしょう？ その順位はいくらだったのかしら？」

「五二位です、お母さん」

「そうでしょう？ 上には上がいます。精進なさい」

「はい、ありがとうございます」

重苦しい空気の中での堅苦しい会話。お母さんの心に触れないように気をつけて、細心の注意を払って言葉を選びます。そうでもないとお母さんは気が狂ったように荒れてしまい、自分を傷つけてしまうのです。だから私はお母さんを守る為に従順します。それが

パパとの約束だから。

そのパパは夕飯時に帰らない事が多く、更に出張も多いのです。私にとってそれは少々心が痛みます。けれどそれは私だけでなくパパも、お母さんも、それに姉さんも同じはずなので、心の奥底にいつもその濁った不満をしまい込むのです。

食事が終わるとリビングに用はないので、ダラダラと食事をしている姉とキビキビと食器を洗うお母さんを置いて二階にある自室に向かいます。

ここまではいつも通りの日常です。本番はここからです、ここからいつもと違うのです。そう意気込むと、途端に鼓動は蒸気機関車みたく不安定になり、けれど、どこか心地の良い大きな脈を打ちます。

学校の友達の話では、夜にはコンビニやファーストフード、それにカラオケなどの娯楽施設へ遊びに行くようですが、私は塾の場合を除き一九時を過ぎれば外出禁止です。現在の時刻を携帯電話で確認すると十九時半。部屋で塾の宿題をしながら、お母さんに気付かれない最適な頃合いを待つとします。席に着き参考書とノートを広げるも気が気でなく、中々勉強に集中できません。

それでも時間はゆるりと流れ、しばらくすると開け放った窓からシャワーの滴る音が響いてきました。私の部屋のほぼ真下にお風呂はあるので間違いありません。音の種類も間違いなくお母さんです。必要最低限の湯量しか使っていないからです。それに比べて姉さんはまるで体に油が付着しているのではないかというくらいの勢いでシャワーを使います。なので絶対に聞き間違っわけがないのです。

シャワーの音を聞く為に窓を開け放しにしていたので、外着からに着込んでいましたが、山は更に寒いはずなので、コートを羽織り、カイロや毛布などの防寒具が入ったカバンを持ち、いよいよ玄関に向かおうとドアノブに手をかけた、その瞬間でした。ドアの向こう側から声が聞こえてきたのです。

「おーい、恵那。ちよっといい？」

右手の二の腕から肩に、そして背中へと鳥肌が波の様に伝います。どうやら姉さんもお母さんの隙をうかがっていたようです。ここで拒否をしてしまうと怪しまれてしまうので、泣く泣くドアを開けることにしました。

「どうしたの姉さん」

「いや、どうもしないけどさ」と言いながら扉を押して一歩、二歩と部屋の中に姉さんは足を踏み入れてきます。扉の前で立ち、入ってこないでとさりげなく主張しているのですが、まるで気付いていません。

「なんでこんなにさつぶいの？」

それは先ほどまで窓を全開にしていたから……とは言えず、言葉を探していると、姉さんは布団にくるまり、胎児のような体勢で話しかけてきました。

「そんなに厚着してバツクパツクまで持ってどこ行くのさ？ クリスマス？ 乳くりあいにもいくの？」

「し、しませんっ！ そんなこと。ただの気まぐれな夜の散歩です」「だからそのバツクパツクはなんなのさ？」

「そのような物、私は持っていません」

バツクパツク。それを見て姉さんは乳繰りあうだなんて厭らしい想像を働かしたのでしょうが、私にはさっぱり何の事だかわかりません。まさかクリスマスに性的な意味があるはずはないでしょう、キリストの誕生日なのですから。……バツクパツクとはどのような性的な意味を持つのでしょうか、想像すればする程、わけがわからなくなりそうです。バツクとは後ろで、パツクとは……パツクリの略？「顔赤くしてどうしたの？ まさかバツクパツクが何かわからなくてエロい物だと思ってるんじゃないんだろうな？」

「どうしてそれを！」

「恵那のお姉さんだからな」

姉さんはふふんと機嫌良さそうに鼻を鳴らします。「バツクパツクってのはリュックサックのことだよ」

「あー、リュックのことですか」

私は背負ったリュックサックをぼんぼんと叩きます。なるほど、背中の荷物ということですね。さすがにこれを持って散歩なんて可  
笑しいです、何キロ歩くのかという話しになってきます。

「でもその服装だとデートってわけじゃないよね」

「ええ、少し遠くまで……山で星でも見ようかと」

「なーんだ」と姉さんは腑抜けた声を出し、ゴロゴロと転がりなが  
ら布団を剥いで立ち上がり、すれ違いに「安心した。クリスマスに  
星を見るなんてロマンだね。また帰る頃に連絡しな。母さんの状況  
を伝えるから」と言って部屋を出て行きました。

一体何の用だったのか見当がつかなかったけれど、やっと仕切り  
直しが出来ます。

大きく息を吸ってから扉を開け、足音を立てないようにゆっくり、  
そろりそろりと廊下を歩きます。心の中はまさにくの一です。難所  
である「つ」の字の階段もほとんど音を立てずに降りれ、そのまま  
玄関に進み、靴は履かず手に持ちます。その理由は履いている間に  
お母さんに見られれば一巻の終わりだからです。それに、そのよう  
な危険を冒すかもしれない状態で上手に靴を履けそうにありません。  
扉に背中を向け、廊下からお母さんの姿が見えないか確認しなが  
ら、ドアノブを下に押し踵から外に出ます。冷たい風がドアの隙間  
から流れ、もうすぐこの緊張から解放されるのかと思うとその冷た  
さも良い物で、少し持ち良くなります。

体を完全に外に出してからドアを閉め、視線をあげ、任務遂行と  
心で呟いた瞬間でした。目の前に人が立っていたのです。私は息を  
のみます、その見覚えのある姿に。

赤い帽子に白い長い髭……ではなく、いえ、そうなのですが、そ  
れだと今日と言う日でややこしく誤解が生じます。恰幅の良い体つ  
きで……ああ、もういくら言葉にしてもサンタクロースを連想させ  
てしまう単語しか思いつきません。あれこれ考えるのが面倒になっ  
た私は、その柔らかかそうな体に飛びつきました。

「お帰りなさい」

今日はもうパパと会えないと思っていたので、その分喜びも一入です。

「た、ただいま。まさか恵那が出てくると思っていたいかなかった。こんな中途半端な格好ですまない」

話を聞くと、どうやらサンタクロースの格好をして私と姉を喜ばせようとしていたらしいのです。家の中だとそのような格好をするとお母さんに見つかれば叱られるので、外で着替え、私と姉と同じようにお風呂のシャワーの音を聞いてお母さんに見られないタイミングで家に入ろうと思っていた所に私と八会わせた、というのです。パパの足下には着るはずだったサンタクロースの衣装が置かれています。

「そうでしたか、見つけてしまつてごめんなさい」

「いや、謝ることではないよ。……で、こんな時間から外出か？」

「そ、それは」

パパはお母さんと違い、私をしついで締め付けようとはしません。けれどもこの時間から外出となればさすがに叱られるでしょう。

私は眼をじつと睨り少し顎を下げ、頭を突きだしました。どうぞ殴つて下さい。その覚悟はできています。

けれど待てども待てども拳は飛んできません。しかし頭を撫でられる様な感触が伝いました。何故褒められたのだろうと眼を薄らと開きパパの表情を除くと何やらニヤニヤしています。

「メリークリスマス」

「め、メリークリスマス？」

そう言葉を返した後、徐々に頭の天辺辺りがほかほかと暖かくなってきました。何かと思い手で触れてみるとふかふかと羊のような感触がいたします。もしかしてこれは？

「帽子ですか？」

「ああ、この年になつておもちゃもどうかと思つてな。香水とかも考えたんだけどよくわからんし、かと言つてネックレスとかだと季

節感無いからな」

パパから頂いたニット帽は全て白い毛糸で出来ていているようです。天辺にもふもふとした丸い物がついていて、編み目で雪の結晶が作られていてとても素敵でした。

「ありがとうございます、私からは何も用意できていないのですが……」

「いいよいいよ。喜んでいる姿を見られただけで満足している。それよりも友達と待ち合わせているんじゃないのか？」

「え、つと、まあ」

あの方が待つているのは私ではなくUFOですけれども。

「うん、いつてらっしゃい。別れついでに。すまないが明日から出張で一週間程家を空けることになった。俺がいない間、皆を頼む」

贈り物を頂いた嬉しさを全て失ってしまったくらいに聞きたくない言葉でしたが、私は覚られないように下を向き。すれ違いに「安心していつてらっしゃい。そしていつてきます」と言って門をくぐりました。

思わず感情があふれ、どうにかなってしまいそうでしたが、気を紛らわそうと帽子のもふもふに手を伸ばしもふもふしていると、何だか心ももふもふしてきて、そのうち早く白井くんに会いたくなつて駆け出していました。

## 第二章 白井優

日が傾き始めた頃、俺は旧図書室を出て、学校からほど近い商店街をぶらぶらと歩いた。数年前は活気があった……ではなく、活気づけようとして作られたと見られるアダムスキー型UFOを象った電灯が道の脇に並び、会社の看板にも無意味にUFOの文字や絵が描かれ、パチンコ屋にもUFO（これもアダムスキー型）のオブジェが、店を吸い上げるといイメージで置かれている。パン屋もUFOに汚染されていて、ただ袋にUFOの絵が描かれたシールを貼ったカレーパンが販売されている。それを一つ買い、今日はクリスマスなので、隣の和菓子屋にも寄りアダムスキー型UFOの最中を購入した。そして商店街の終わり辺りにあるUFOラーメンを置いたラーメン屋で夕食にすることにした。

このUFOラーメン太郎に置いてあるUFOラーメンには、具にメンマとわかめの他にイイダコと輪切りされたゆで卵とホタテが入っている。店主に理由を聞くと、それぞれに異星人、月、UFOに見立てているのだという。スープは醤油ベースで魚介が強く麺は細麺を使っている。特に旨くも不味くもないラーメンで、いつも味が安定していることだけが取り柄と言える。

商店街にはもう一店ラーメン屋があるが、そこもUFOラーメンを置いている。けれど、ただナルトにUFOが描かれただけの、少し味のいいだけのしょうゆラーメンだ。

食べ終えて店を出る。ざっと商店街を見渡す。数年前までは観光客がそこそこ歩いていたことが嘘の様に人は少なく、地元の間人が来ることでギリギリ成り立っている商店街。町の開発が進み、大型のショッピングモールが建てられればすぐにシャッターが降りるだろう。そうなれば陳腐なUFOの絵や模型などが見られなくなってしまう。それはそれで少し寂しく思った。

しばらく歩き、この町の外れにある病院の入院病棟に入る。 30

3号室にはいつもと同じように憂鬱な表情で窓から外を見つめる弟の姿が見えた。

弟は生まれてから約六年もの間を病院で過ごしている。その為、読書やゲームばかりしているのもで視力が落ち眼鏡をかけている。そして甘やかされて育ったので凄くわがままだ。

「よう」と声をかけても知らんぷりをしている。

「これやるよ」

さつき商店街で買ったUFOパンとUFO最中をベッドの上に置く。弟は一瞥して、再び視線を外に向けた。

「こんなのいらぬ。忘れた？ 僕が欲しいもの」

忘れるわけが無い。そのせいで俺は学校で異星人になっているのだから。

確かそれは弟が三歳の頃で、俺が中学三年だった頃だから二年前だ。年の離れた弟の誕生日に何を贈ればいいのかわからなかった俺は直接聞く事にした。そのとき病室のテレビでは正月明けの特番でオカルト特集をやっていた。

「何か欲しいもんあるか？ いくらまでとかケチなことは言わないから言ってみる」

すると弟はテレビに向かって、すつと右人差し指を指した。

「これ、これがいい」

これ、とはメキシコの上空で鳥のように群れをなして飛ぶ、UFOの大群だった。

「UFO？ こんな無理だつて。UFOは人が持っていないもんじやない、撮る物だ」

「とるつて、カメラで撮るつてこと？」

「そうだ」

「じゃあ、それ」

タイムマシーンがあれば、間違いなくここに戻り、違う方法で弟を説得していただろう。何が撮るものだ。撮れるもんじやないだろ。いくらUFOの町と言えど、ただの町おこしであつて、実際に見た

って人はいない。いたとしてもそれは町おこしの一環としてホラを吹いているのだろう。

結局その日から三日三晩、そうはちぼん伝説に出てくる尾錠山で空を眺めていたが、UFOの気配など無く、綺麗な星空が見えるだけの寒い夜だった。それを弟に伝えると、「じゃあ、UFOが見つかるまでずっと僕は四歳にならない」と駄々をこねたのだった。

約束は約束なので、週に三回程は尾錠山でUFOを探したが見つからず、一年経ち、そして二年経った。

「お前、今年で何歳だ？」

「三歳」

馬鹿野郎。お前は今日で五歳になったんだよ。と、言いたいところだけど約束を守れない俺が言うべきではない。

俯きながらそんな思い出に浸っていると額にUFOカレーパンが飛んできた。ビシヤというビニール袋の音と柔らかいパンの感覚が伝わる。食べ物を粗末にするなど言ってやろうと視線をあげる。すると弟は顔を真っ赤にして俺を見ていた。

「ここに来る暇があるならUFO探せよ。馬鹿」

床に落ちたカレーパンを拾い、俺は病室を後にした。

掲示板に貼られた町内のクリスマス会の案内で、UFO鑑賞会なんて催し物があった俺は笑いをこらえるのが必死になった。

もう世間はUFOなんて流行が過ぎた物に興味など無く、笑いのネタくらいにしか考えていない。それなのにそんな物にまだ必死にすがりつくこの町、そして弟……俺もか。

すっかり日が暮れ、都市部では交際している男女がロマンチックな食事をしているだろう、そんな時間帯。俺も俺で、考えようによつてはロマンチックなことをしていた。

尾錠山の中腹にある神社で星を眺める、いつものように。いや、本当はUFOを探さなければいけないのだが、さすがにあんなこと

があつた今日では探す気にはなれず、寝転がってブーツと空を見上げていた。

月が天辺に昇るにつれ、次第に寒さは深まり雪が散らつき始める。それを見てポケットに入ったカレーパンを思い出し、口に放り込む。外気で冷えて歯にしみるが、腹が減っていたので二口で完食した。体を温めてくれていたカイロは冷たくなり始め、そろそろ帰ろうかと携帯で時間を確認すると二十二時を過ぎていた。ゆっくりと立ち上がりズボンについた草を払い、自転車を置いてある鳥居に向かった。

道也に進めば本殿と拝殿があり、その先に鳥居がある。その本殿を曲がった瞬間だった。腹にタツクルを受けた様な強い衝撃を受け、犬か猿にでもぶつかつたのかと目の前を見ると、女性が倒れていた。携帯電話のフラッシュを使い、顔に光を当てて大丈夫かと訊ねるが返事は無い。

……どこか見覚えのある顔なので、もう一度フラッシュを当てて確認すると同じクラスの羽田だった。

彼女は高校の一年から同じクラスだ。成績優秀で勉強も運動も学年トップレベルで、それを鼻にかけないで誰にでも優しく接する変な奴だ。良く出来すぎている女だ。

いつも人のことを思い、空気を読んだ行動を心がけている、ように思いきや世間離れした所もある。

例えば政治の授業の時に、羽田は教師に向かってこんな質問をした。

「のーぱんしゃぶしゃぶとは何ですか？」

普通の男子がこんなことを質問すればすぐにふざけるなど叱られるのだが、羽田の場合は違い、真面目で通っているのでそんなことはなく、「あとで教えるので職員室へ」となった。その羽田は教室の空気が一変したことで『のーぱん』を『ノーパンツ』だと気付いたよう、顔を真っ赤にして席に着いたのだった。ちなみに後で職員室に行つてちゃんとノーパンしゃぶしゃぶについて学んだそうだ。

それを真面目だなと褒めていいのか俺にはわからない。

まあ、羽田については真面目で優しい少し変な女子、という印象を持っている。そんな真面目な彼女がどうしてここにいるのかわからない。確か家庭の教育が厳しいとも寺内から聞いた覚えがある。そうならなおさら可笑しい。

ニット帽にマフラーを巻き、手袋はしていないが分厚いダウンパーカーとリュックも背負っているので家族と参拝に来たのではなく一人で来たのだろう。

とりあえず起こさなくてはと思い、頬に三往復くらい平手を打つが目を覚ましそうになく、全くの無反応だ。救急車を呼ばなくてはいけないのかと考えたが、高校生がこの時間に男女で何故に外出しているかと問われそうで、こちらの話など聞かず不健全だ、みたいな流れに間違いなくなるので躊躇してしまう。ならば神社の神主に……と思ったが、も同じ対応をされるだろう。

ではどうすれば一番後処理が楽なのか、と考えてみる。しかし良案が出てこないので羽田を横に抱えて元の場所に戻り、様子を見ることにした。

どうしてこんなことになったのだろうと、ため息まじりで正面に広がるUFOの町を眺めた。能都半島の境目の田舎だが、住宅街と道路と車のライトでそれなりに明るく、それなりにきれいでもある。目を細め、くるくると光るパチンコ屋のUFOの模型が見える。偽物のUFOは町中に溢れているのに、本物は気配すらしない。皮肉な町だ。

その瞬間だった。視線に光の玉の様な物が映った。それは山から町の方へ出て行くように幾つも幾つも飛んでく。

いつかの病室で見たメキシコの上空を群れて飛ぶUFOの映像に似ていた。

青、赤、橙、緑、それぞれ四色の光を放つ光の円盤が推定十個以上飛んでは消えていった。

見蕩れている場合ではないが、体は思うように反応せず、異星人

に電波で体の動きの自由を制限されているのかと思わせるくらい手と足が震え、ポケットに入っているデジカムを取り出せずにいた。

やっとの思いで手に取っても、手の震えで電源ボタンを入れることが出来ない。指が言うことを聞かないので、いっそ手を丸め叩くようにして電源ボタンを押す。すると起動し、すぐさま先ほど群れをなして飛んでいたUFOの辺りにカメラを構えるが、もう姿は消えていた。それでも諦めきれずに連射し、二分程して我に返り、ため息をついた。

こんなことはもう一生起こらないかもしれない。そう思うとため息どころではなく、本当に気持ち滅入ってしまった、全身に力が入らなくなり眼を閉じてその場に倒れ込んだ。

撮った写真に何か写っているかもしれない、そう思い直し目を開けた瞬間だった。

「うおいつ！」

目の前に羽田の顔があつたので思わず声をあげて驚いてしまった。「気がついたならまず声をかけるよ、びっくりしただろ！」

怒声を浴びせても何故か羽田に反応は無く、首をちょこんと傾げたくらいだ。興奮しすぎて呂律が回らなかつたのだろうか？ それとも……彼女の記憶が飛んでいる？ そんな考えが浮かんだ途端、急に焦ってきた。

「さっきまで気を失っていたことはわかるか？ 俺のことはわかるか？ 話したことは数える程しかないが、二年間クラスが同じだから名前は知らなくても顔くらい覚えていたらどう？」

三角座りをして俺に視線を向けている羽田だが、視点は俺の顔ではなく、もっと遠くを見ている様な気がした。もしかして意識が朦朧としているのかもしれない、と思った瞬間だった。羽田が口を開いた。

「知っている」

「そうか、よかった」

「……………異星人でしょう？」

いや、確かに学校ではそれで通っているが、学校外でそれを言われるとさすがに恥ずかしくなってしまう。

「自分も異星人。この星でまさか出会うとは思っていなかった」  
？

「では、また会いましょう」

羽田は立ち上がるとスーツと素早く歩いて、懐中電灯や携帯電話のフラッシュも付けずに神社の鳥居の方へ、その暗闇の中へ消えて行った。呆然とする俺を残して。

### 第三章 羽田恵那

私の朝はいつも突然に始まります。それは眠っている最中に米俵をどさつと雑に置かれる様な感覚がお腹、または腰に伝わるからです。

ちなみに今日はお腹でした。

「ぶっっ」

なので思わずそんな無様なうめき声を出してしまいます。

「おはよう」

私のお腹の上にお尻を乗せてにこやかな笑顔と晴れやかなる声で姉さんは私の目覚めをお迎えしてくれます。もっと優しい起こし方は無いのだろうかと問いつめたくなるのですが、姉さんの行動とは裏腹な優しい笑顔と声でその気持ちは相殺されるのです。

「おはようございます」

こうして私の声を合図に二人して洗面所に向かって顔を洗い、朝食を食しにリビングに向かい、いつもの朝が始まります。

階段を下りながらお腹をさすっていると、ふと昨日のことを思い出しました。どうやら頭部にもこのような衝撃を受けた様な気がするのですが……再起動を始めたばかりの頭ではどうにも思い出せず、脳みそがふわふわとしているような、どこかスモッグで覆われている様な、そんな感覚のお陰でいまちはつきりしません。

洗面所で先に顔を洗い終えた姉さんが昨日のことを訊ねてきました。

「今日は目覚め悪かったのは昨日のせい？」

ですが、こちらは顔にじゃばじゃばと両手でお湯をかけて洗っているわけなので答えられるはずがありません。

「だって、いつもならヒップドロップ一発で起きるのに、今日は三発だったもんね。山登りして疲れてたのかな？ でも目を跨ぐまでに帰ってくるなんて恵那も律儀よね」

私はいつもお腹にヒップドロップなんてされていたのですか……  
衝撃です。それはさておき、私には昨日の記憶がほとんどないので、  
残念ながらこの話にはついていけません。適当な言葉でかわすしか  
ないのです。

「ええ、鍵を開けてくれてありがとうございます」

「いや、いいっていいって。こつちも助かってるからさ」

私が姉を助けている。間接的な意味になりますが間違っではないま  
せん。

姉さんは二浪して偏差値が最底辺の大学に受かりました。けれど  
まともに通ったのは入学から二年間で三週間程です。私はそれで大  
丈夫なのかと訊ねましたら、姉さんは大学とは高校は違うから問題  
無し、と言います。お陰で姉さんの生活は逆転し、夕方頃に起床し、  
朝と昼の狭間で就寝するのだそうです。なので、姉は朝食を摂る早  
い時間でも起きています。そして朝食をお母さんと二人で食す  
のは嫌なので私を毎朝起こしにくるのです。

それ以外にも精神的に私が姉さんを助けているのかもしれない  
が、あまり深く考えないようにしています。

リビングに行くとお母さんはテレビも点けず席に着いていて、  
その机の上にはコーンフレークの箱と牛乳パック、それとそれらを入  
れるお皿が置かれています。私は席に着いてから、なるべくじゃ  
らじゃらとコーンフレークの音を立てないように皿に入れ、牛乳が  
飛び跳ねないようにゆっくりと皿に注ぎました。そしてお母さんの  
いただきますの声の後、私は復唱してからコーンフレークにスプー  
ンをつけるのです。

気がつくとも私はリビングから出た廊下に立っていました。

例え話をしているわけでなく、朝食を食した覚えがないのです。  
もしかすると昨日の疲れのせいで食事中に寝ぼけていたのかもしれ  
ません。

自室に行く前に姉さんの部屋をノックし、そのことを訊ねました  
ら、「三杯も食べて腹壊さないか心配だったよ」という答えが返っ

てきましたので、いつもより多めに食べたと言っことになります。私はあまりコーンフ레이크が好きではありませんので、それは少し変です。けれど、疲れを取る為に体が無意識に栄養価の高いものを求めたのかもしれない。

このような解決することができない事柄にいつまでも頭を悩ませていてはそれこそ熱量の無駄と言っものです。それならば塾の宿題に当たて方がまだ効率が良いので、私は自室に入り、塾の宿題の残りをするため席に着きます。そして今日の一日の予定を考えながら筆記用具などの準備を行います。

確か、十時から塾で冬期講習が行われ、一六時終わり、それから余った時間でお母さんに頼まれてる夕食の買っ物をして帰宅。それが本日の予定です。更に余った時間で織絵さんに昨日の報告ができればいいなと思っます。

### 第三章 白井優

昨日の夜に降った雪はどこへやら。そんなことを思わせる程、空の丁度天辺から降り注ぐ太陽光は何気なく訪れた旧図書室を暖めてくれていて、いつもならソファーで心地よく昼寝ができるのだろうな、と思わせた。

いつもなら。

そう思わせた理由は昨晚にある。

羽田が別れ際に残した言葉が気になって仕方が無いのだ。羽田のことは良く知らないが、真面目一辺倒な女子生徒があのような冗談を言うとは思えないし、嘘をつくとは思えない。それにメリットなどない。

もしもただの遊び心で自分のことを異星人だと言っただとすれば、それはそれで気になる。羽田のことだから何か重要なことがあるのかもしれない。

などとうだうだと考えながらオカルト雑誌を読んでいるが、ほとんどが流し読みで頭に入っていない。

万が一の事だが、本当に羽田が異星人だった場合。もしくは昨晚に体に乗っ取られた場合、俺は相当危険なのではないか？

メキシコは別だが、我が国はUFOや異星人の存在を認めていない。となると、その存在を知った俺を異星人は消しにくるのではないだろうか？ 羽田が異星人だという噂を流させない為に。いや、逆の場合も考えられる。日本側が俺を消しに来る可能性だ。地球の周りをうろつき数えるのが面倒になる程の人工衛星で見つけ、UFOの町に潜む政府公認の暗殺屋が、異星人の存在を知った俺を殺してくるのではないだろうか？ せめてその時は鉄砲で心臓を貫いてくれる事を祈る。爪を一枚ずつ剥ぐ様な拷問は避けて欲しい。

睡眠する事で悪い想像を消し去ろうと思ったが、次から次へと不燃ゴミの様に悪い妄想が増えて消えない。これは瞼を開き、読書に

集中した方が精神的にマシだろうと考え瞼を開くと、目の前に羽田の顔があった。

「ぐっつ！」

心臓が大きく、そして早く慌ただしく高鳴る。

どうしてこの部屋に異星人がいる？

驚きすぎると声が出ないという情けない状態に陥ってしまう。

唇が震え、表情が強張り変な笑顔になっているだろう。昨日のUF0を見つけた時よりも体の自由が利かない。そうこうしているうちに異星人は更に顔を近づけ、その距離およそ十センチ。羽田だとしたら淡いドギマギを起こしているだろうが、こいつは羽田の皮を被ったエイリアンなので鳥肌が全身を覆う。そして異星人は口を開いた。

「コーンフレークはありますか？」

ワケのわからぬ問いかけに俺の脳はフリーズした。情報を処理しきれない。

「……白井くん、コーンフレークはありますか？」

白井くんという呼び名で俺は多少正気を取り戻す事が出来た。俺の苗字を知っているのだから、彼女は羽田で間違いないだろう。俺は異星人に名乗っていないのだから。と言う事になれば、異星人発言はただの悪戯なのだろう。

「コーンフレークなんかここにはない。旧図書室だぞ」

すぐさま俺は問いつめる。

「それで。昨晚、どうして異星人などとわけのわからんことをほざいた？」

微笑んだまま表情を変えない羽田は三秒くらい間を置いて彼女は口を開いた。

「……そういえばそのようなことを誰かに言った気がしていました。があなたでしたか？」

「えっ？」

二重まぶたを全開まで開き、大きな瞳で俺を見つめる羽田は人形

の様な雰囲気を感じさせた。綺麗、だとかそういう意味ではなく、悪い方。つまり表情が作られていて不気味なのだ。教室でみせる気遣い溢れた人間味ある彼女の表情とは打って変わっている。

「まだ脳をコントロールしたばかりだったので、覚えていないのです。あなたも異星人でしたよね？ その様子だと大分慣れているように思えます」

「脳をコントロール？ 慣れ？」

おどろおどろしい言葉を聞いて平常心を保つ事などできなかった。……ええ、あなたはすごいですね。驚いたり怒ったりといった感情を完全に表情で表現出来ています。それに普通なら異星人であることを隠すのに、逆に言ってしまう事で猜疑心を無くすという、人間の心理を理解しすぎている行動。相当優秀な方だとお見受けします」

そう言って彼女はちょこんと頭を下げた。

「こうすることがこの国の礼儀なのですよね？ あっているでしょうか、先輩」

今、俺はどのような対応をすれば正解なのだろうか？ このまま異星人な彼女の勘違いを受け入れ、異星人のフリをすればいいのか？ それともここで訂正して……いや、そんなことをすれば、何をされるかわかったものじゃない。なにせ人を洗脳する程に高度な文明を持った奴だ。相当なバッドエンドが待っているに違いない。

だからここは異星人の先輩になりきるしかない。

「おおつ。その調子で頑張れ」

「……はい、これからご指導宜しくお願いします」

「えっ!？」

「……いやですか？ 変な方ですね。同士を助け合う事は命と同じくらい大事だと教わったのですが……もしか……」

「そうだったな、そうだった。うん、ドンと頼れ！ ドンと！」

調子のいい事を言っても、いざ頼られるとなれば困るのは俺の方だ。彼女の星の事を全く知らないのだから。だからと言って地球上

の文献から探るのは至難の業だ。となると方法は一つ。彼女から聞き出す以外に無い。しかし普通に「星の事を教えてくれ」と言えば怪しまれるに決まっている。彼女の信頼を損なわずに情報を得る方法を考えねばならない。

追い込まれてはいたが、追い込まれていたからこそ、頭の回転が速くなったのか、良案がすぐに浮かんだ。

「まずお前がどのくらいの知識を持っているか、つまりどのくらい出来る奴なのか知りたい。指導のレベルというものがあるからな」

「……はい、先輩。何でも答えてみせましょう」

いざ問題を出すとなれば思いつかない。問題内容によっては地雷を踏む可能性があるだろう。ここは広く浅い問題を作るべきだ。一つの答えがある問題ではなく、複数の答えがあるものだ。

「まずこの星にどうやってきたか答えよ、ただし地球人にも理解できる様な答えを求む」

「……はい。地球人に対する知識量も伴わなくてはならないという面白い問題です。少々言葉をまとめますので時間を下さい」

「よからう」

彼女は腕を組んでうーんうーんと唸り始めた。もしかすると考える所にも地球人らしさを表現しているのだろうか？ ……度々こちらに顔を向けるので、狙ってやっていると見て間違いないようだ。表情を作るのは難しいと言っていたくせに、どうだ、という顔はやけに上手で苛立つ。

「今は人間のフリはしなくていい、解答に集中しろ」

「………はい、ごめんなさい」

するとリカちゃん人形のように表情がなくなり、それはかなり不気味だったが自分から言ってしまったのでやめるとは言えない。しばらくして彼女の右手が拳がった。

「答えてみる」

「………はい。私は時と空間の波に身を任せ、身なり一つでこの星にやってきました」

うん、全くわからない。

「すみません、まだ慣れていないので彼女の言葉からどうやってこの星にきたのか、という問いに答えるのは不可能です」

それは、それだけ彼女の星と地球の文明のレベルが乖離しているか、それとも彼女と羽田の知能レベルが乖離しているかということだろう。そしてそれは間違いなく前者だ。地球ではまだ文明のある星すら見つけられていないのだから、その星を見つけ、生息生物を洗脳する力を持っている彼女の星は俺たちの想像を絶する程の文明を持っているに違いない。俺が出した質問は、千年前の人の言葉で自動車を説明しろと言っているのと同じなのかもしれない。

それでも彼女は説明を続けた。きのせいかもしれないが彼女の表情は無表情ではなくなり、眉に力が入り、眼の角度も鋭利になっているように感じた。

「地球の人々はUFOを乗り物だと思っっていますが、あれ自体がわたし達。意識をあのような形に変え、さらに大きさも変え、意識レベルが落ちた人間の体に入り、脳を体で覆ってコントロールするのです」

なるほど。だからこの国で目撃されるUFOは様々な形をしているのか。一般的な円盤型、そして球体や三角形のものに、葉巻や人型といった変な物まである。それは彼女達が姿を変えられるから。

「地球上には様々な形のUFOがあるが、なぜ形を変えている？」

「……それは、虚栄に近いのかもしれませんが。複雑な形状をすることとはとても難しいのです。だから地球上には多くの円盤型と呼ばれる楕円状のものが発見されています。それは簡単な形状しかできないような未熟者だから、人間に発見されるのだと言う事にも繋がります。それで、次の問題はありますか？」

「あ、ああ。では人の脳をコントロールした際に起こる副作用を教えてください」

これはすごく大事な問題だ。解答次第では羽田を早く助けなくてははいけなくなるのだから。

「……副作用？ 特にないと思われず。あるとすれば羽田恵那の日常生活に一時程度程度の記憶の断絶がある程度でしょう。我々は一日のうち一時間しかコントロールできないのです。その間、彼女の意識は睡眠状態に近くなるので記憶はないに等しいでしょう」

「ということは、それほど体の心配はしなくてもいいだろう。ただ、身に覚えのないことが起こるといふ点では可哀想だが。」

けれど想像していたよりもずっとゆるくて良かった。一生異星人に脳を寄生されたままだとか、その影響で寿命が縮むことや体が腐っていくだとか、そういう事がなくてホッとする。

「それじゃ、次の問題だが……」

と言ったところで問題はそこまでと、彼女は広げた手を俺の口元に持ってきた。

「すみません先輩。もう恵那は塾の時間のようなので失礼させて頂きます」

「ああ、わかった」

彼女は床に置いていたかばんを肩にかけ、扉に手を伸ばす。

「あ、あのー！」

思わず声が出ていた。このまま帰してはいけない、そう思ったからだ。

彼女は、ずっと首だけこちらを向けた。

「また会ってくれ。いや、明日はどうだ？ コスモアイルという宇宙博物館を案内したい」

「……えっ、もちろん……喜んで。あの白井くん？」

「うん、なんだ？」

「明日は織絵さんと約束があつて……来週もずっと塾なので、空いている日が三十一しかありませんけれど、それでも大丈夫ですか？」

「えっ？」

いきなりもじもじして顔を火照らす彼女を見て俺は少し戸惑う。

先ほどのほぼ表情の無い彼女と対照的すぎる。

「あっ！ 三十一日が無理なら、その明日、明日の予定、織絵さん

に断ります!」

「いや、いいよ。三十一日の十一時に駅で待ってるから」

「はい、宜しくお願いします」

そう言っただけで彼女は勢い良く腰を斜めに曲げてお辞儀をし、素早い動きで扉を開けて閉め、旧図書館から出て行った。

どうしたあの異星人? いきなり人間らしいフリをして……と疑問に思った瞬間、俺は苗字で呼ばれた事に気付いて愚痴る。

「あいつ、コントロールを切るなら切ると言えよ」

## 第四章 羽田恵那

「お、織絵さん、織絵さんですか！」

「どしたの、恵那ちゃん？」

慌てて学校から飛び出し、全力で自転車を漕ぎながら塾に戻る途中、迷惑かもしれないと思いながらも五回程織絵さんに電話をかけた直し、六回目でやっと出た織絵さんは少し慌てていました。

「ごめんなさい。アルバイトだった？」

「うん、そだよ。初めは後でかけ直せば良いかなーと思ってたけど、あんまりいっぱいかかってくるから心配になってね。でもその声の調子だと身の危険が迫ってる系ではなさそうだね」

「ええ、心配をかけてしまって申し訳ないです」

織絵さんはコンビニエンスストアでアルバイトを行い、お小遣い程度の稼ぎを得ています。週に三回〜四回、お昼から夜の十時までの六時間くらい働くそうです。私もそのような経験をしてみたいのですが、お母さんが学生の本分は勉強だということで我慢しています。「いいよ、お昼のお客さんが捌けて暇になった所だから気にしないで。で、あれだけいっぱいかけてきたんだからよほど重要なニュースを用意してるんでしょうね」

電話越しの織絵さんは文字にすればニシシとおどけた笑い声を上げています。

「あの、白井くんと出かける事になりました」

「……………はい？」

「だから、白井くんと出かけ」

「聞こえてるっの！」

なぜか織絵さんは突然不機嫌になってしまいました。どこに地雷なる物が潜んでいたのか見当もつきません。

「どうして怒っているの？」

「ええ？ 恵那ちゃんに怒ってないよ、あの腐れ宇宙人に対して怒

ってるんだよ。あいつ女に興味なさげなのにちゃっかり手を出して  
るじゃない！ 腹立つわー」

「それは私も思いました。異星人なのに少しおかしいですよね？  
私に興味を持ったのでしょうか？」

「うっさい！ 恵那もうっさい、声が浮ついてるよ。幸せそうだな  
によりだよ、じゃあそろそろ切るね。またバイト終わったらかけ直  
す」

「はい、わかりました」

「最後に聞かせて」

「はい？」

「どっちから誘ったの？」

「……………さあ？ 覚えていません」

そう答えると織絵さんは何も言わず電話を切りました。ありえな  
い答えだったので気を悪くさせてしまったのかもしれない。

けれど本当にわからないのです。

塾の昼休みを迎えお弁当を食べようと思っていたのに気が付くと  
学校の旧図書室で白井くんに出会っていて、さらに宇宙博物館に行く  
約束までしてしまっていたのです。何が何やら当事者の私からわ  
からないのですから織絵さんはさらに意味不明でしょう。

すべて無意識が行ったのでしょうか？

しかし無意識にそのようなことが可能でしょうか？

けれど、無の意識が行った事を意識がある状態の私が考えても、  
ヒントがない状態では正解を導くことは難しいでしょう。ならば今  
は、無意識の私に好きなようにさせておくのも一考かもしれません。  
なにせ実害はありません、それどころか幸福を運んでくれるの  
ですから。

楽をして白井くんに近づけるなんて、夢の様な話です。

## 第四章 白井優

日が暮れ始め町が橙に染まる頃。俺は学校を後にして商店街にある写真屋に向かっていた。クリスマスは終わつたと言うのに、まだツリーやリースや電飾を片付けていないずぼらな店を横目に、地震がくれば間違いなく倒壊すると言い切れるくらいボロい写真屋の扉を開けた。ちなみにこの写真屋はずぼらとは無縁だ。年がら年中同じ内装で、行事や季節によって飾り付けなど行う事はまずない。

昭和初期からの建物らしく、外見同様に中もボロボロで、濃い木の壁と床に覆われている。カメラのレンズやフィルム、インスタントカメラなどが置かれた棚もボロボロの木だ。扉の正面にあるカウンター（もちろんボロい）に視線を向けると丸イスに座った小さい女が視線を合わせてきた。

「鉄板やな」

ニヤニヤと写真を手にもって観ながらこの店の店主である明菜さんはそう言った。

見た目は小学生だけど、実年齢は大人……らしい。体の線が細く、活発な顔つきをしていてさらにショートヘアなので、休み時間によく男子と良ぶ児童というフレーズが思いつく。ちなみに方言を使い、関西出身なのか疑ってしまう様なエセ関西弁で話す。

「何が鉄板ですか？」

覗いてみると俺が撮った写真がカウンターに置かれていた。おそらく手に持っている写真も俺が撮った物だろう。

「趣味が悪いですよ、人の写真を見るなんて」

「アホ、これが楽しんで写真屋なんかしようもない仕事してんねん。それに安いんやから文句言うな、アホ」

明菜さんが言うように、確かに普通の写真屋で現像するよりも半値近い値段なので安い。そして早いとは言えないが一日〜二日で仕上げてくれる。だから週に四回程カメラ片手にUFOを探しに行く

こちらとしては助かっている。接客態度は最悪だが。

俺はカウンターの上に現像料として五百円玉を置いた。

「まいどありっ。茶でも飲むか？ 紅茶くらいやったら淹れたるけど」

「どうして？ いつもはそんなサービス無いのに」

「なんか話したそうな顔してるからなー」

明菜さんはそう言うのと奥に入って行った。なぜわかったのだろう、もしかすると表情で気付かれたのかもしれない。

いや、それとも声色か？ 何が決め手となったのかはわからないが、明菜さんはたまに俺の心を読み、時にアドバイスを、時に毒をお見舞いしてくれる。そしてあとの大半は笑うだけだ。

しばらくするとちよこちよこペンギンみたいな小さな歩幅で両手に白いカップを持ちながら明菜さんは戻ってきた。しかしそのカップから漂う香りが紅茶の品の良い香りではなく、ガツンに鼻にくる感じた。カップを覗くと真っ黒の液体が注がれていた。

「すまんな異星人、茶っ葉きらしてたからコーヒーで堪忍して」

「じゃあいいです。ブラックは苦手ですから」

「知ってる。いつも店の前を通るとき、カフェオレ飲んでるからな」

「じゃあどうして？」

訊ねるが明菜さんは答えず、憎たらしい笑みを浮かべている。ふにふにと柔らかかそうな頬をつねりたくなるが、やれば次は何を飲まされるかわかった物じゃないのでここは我慢。

「では、いただきます」

やっぱり苦い。ミルクも砂糖も入っていないインスタントコーヒーの苦さは舌を麻痺させるほどの刺激を持っている。だが明菜さんは悠々とした表情でそのコーヒーを飲んで……。いや、よくみるとブラックではなくミルクが入られている。

「明菜さんはミルクありなんですね」

「そっやで、砂糖も二本入れとる」

「もう帰ります」

「アホ。写真はどうなってもええんか？」

ひらひらと俺が昨日撮った写真を入れた封筒と思しき物をふる明菜さんは、本当に楽しそうで、悪魔的な笑みを浮かべニヤついている。彼女を相手にしていると小学生におちよくられているようで本当に腹が立つてくる。

早く話を済ませ、コーヒーを飲んで帰る事にしよう。

「明菜さんも見たでしょう？俺が撮ったUFOを」

「ああ？ぶれまくってたけど光ってるもんが映ってたな。あれUFO？」

「そうです。そうはちぼん伝説の山で撮ったんです」

「でもなー。何か丸いもんが光ってるようにしか見えんけどな。ライトを投げてる感じ」

やはり実物を見ていない人は写真を見ても疑ってしまうようだ。

明菜さんが持っていた封筒をもらい、撮った写真を確認すると、明菜さんが偽物じゃないかと言う気持ちがかかるくらいにボケていてはつきり写っておらずUFOなのか街灯なのか見分けがつかない。けれどそれはわかっていたことだ。問題はそこではない。

「これで弟は許してくれますかね？」

「どやろ。うちやったら破るけどな」

酷いことを言う。何年も山を見続けてやっと撮ったUFOだというのに。例え偽物だと気付いても、労いの言葉の一つくらいかけてやってもいいだろう。

まあ、気を使われて偽物と気付いているのに本物として受け取られるより癪だが。

半分以上入ったカップのコーヒーをグツと一気に飲み干す。

「言いたかったことはこれだけです。ではまた来ます」

「おおきに」

舌がジリジリし、すぐに自販機で清涼飲料水を買いたかったが、我慢して最後の質問をした。

「明菜さんは異星人に会ったことはありませんか？」

彼女は頬杖をついてしばらく考えると、真顔で俺の方を指差した。  
「お前だけや」

## 第五章 羽田恵那

夢のような出来事から数日が経ち、ついに今日は大晦日。白井くんと宇宙博物館に行く日が来ました。今日もいつもと同じように姉さんに起こされ、顔を洗い、朝食を食べ、歯を磨きますですが、ここ数日、コーンフレークの謎が付きまとっています。

クリスマスの次の日の朝食からコーンフレークが出るというのまにか完食しているのです。その現象が起こった日の帰り道、お母さんに頼まれたお使いでコーンフレークを二箱のはずが知らないうちに六箱も購入していたのです。もちろんお母さんからはもの凄い怒声を浴びせられました。

謎はもう一つあって、織絵さんとカフェでパフェを食べていた時なのですが、気付くと、いつもアイスクリームのかさ増しで邪魔だと思っていたコーンフレークを綺麗さっぱり平らげていたのです。しかも織絵さんの分まで。

全て無意識の仕業なのですが、どういうことなのでしょう？ 無意識を使う為にはコーンフレークの栄養分が必要なので、それを摂取するために無意識になっているのでしょうか？ なんだか奇妙な現象です。

あれから少し無意識について調べましたが、実際にこのようなことを人は行うそうです。例えば、風邪がひきそうになればカレーを食べたくなるそうです。それはカレーに含まれるターメリックが肝臓の働きを活性化させて、免疫力を高めるため体が無意識に欲するそうです。ですので、私の体はコーンフレークの栄養分を欲していると言う事になるのでしょうか。

しかし、もう一つの方。白井くんに今日の約束を取り付けた方の無意識はどうなのでしょう？ この件についても少し方向が違うかもしれません。類似点の多い事件がありましたので覚えておきました。

今から二十年程前、カナダで無意識のうちに殺人を起こしたという奇妙な事件がありました。

容疑者は睡眠中に二十三キロ離れた彼の嫁側の実家に向かい、嫁側の母を殺し、父に重傷を負わせたのですが、容疑者は全く身に覚えが無かったそうです。

その容疑者は職を失っていて、数日後にその義母と義父にその件を伝えると奥さんと約束していました。それに対し心的外傷を負い、二人を知らず知らずのうちに襲っていた、というのです。そして彼は検証の結果、夢遊病を患っていたことがわかり、無罪になったのでした。

私は正直に言うところな馬鹿な話があるわけないと思いました。きつと加害者側が無意識だと嘘をつき、それに対し弁護士が素晴らしかったので無実になったのだろう、と。けれど自分もその無意識を体験してしまったので、ありえないこともないだろうと思ってしまうのです。それにこの殺人者の気持ちも凄くわかってしまいます。

激しい後悔と自分の中に潜む何かに対しての恐怖。

ですが私には殺したいと思う人などいないので、そこまで深く考えないでいいでしょう。

そして私なりに導いた無意識を呼び出した原因ですが、会いたくけど嫌われたくないという意識が強まり、白井くんとのお話が億劫となくなってしまつたというジレンマが発生したので、無意識な私が顔を出して解決してくれたのかもしれない。

そんな考え事をしている間に待ち合わせの時間は迫り、そこそこ慌てながら着替えなどの準備を行うことにしました。するとドアがノックされ、姉さんの声が聞こえてきました。

「ちよつといい？」

そこそこに急いでいるので良しとしましょう。

「いいですよ、入って下さい」

入ってくるなり姉さんは私の姿をまじまじと見て動きを止めまし

た。

「何か用ですか？」

「うん、いや、あんた出かけるの？」

「その言い草だと出かけるなんて思ってもなかったと言いたそうです  
すね」

「だって織絵くらいしか外で友達いないでしょ」

私にだって友達はいくらもいます、……ざっと思い浮かべられる  
顔だけで両手の指の数くらいは。けれど自宅の距離など時間の都合  
が合いにくいので結果的に織絵さんとはかり遊んでいるのです、と  
強がります。

「うるさい」

「あ、怒った」

嬉しそうに姉さんは言っ指を指します。まんまと怒らされてし  
まいました。むかむかとするこの感情を消すには姉さんを驚かせる  
一言が重要です……何も思い浮かびませんが。

「誰とどこ行くの？」

その言葉を聞いた瞬間、私の脳の中にあるであろうひらめき電球  
がピカリと光りました。

「白井くんです」

「白井……くん？ 男勝りな女なの？ それとも男になりたい女？」

「女という固定概念を無くして下さい」

その言葉でやっと私が男の方と出かける事に気付いたららしい姉さ  
んは、みるみる内に顔の血の気が引いていき青くなりました。

私は心の中でウシシと生意気な笑い声を上げます。

よろけながら姉さんはゆっくりと私のベッドに倒れ、顔を布団に  
押し付けながら深呼吸を何度か行い、グワツと勢い良く私に顔を近  
づてきました。黒目が大きく見えて少し怖いのです。

「何ですか？」

「男と遊ぶのね」

「ええ、白井くんと市立の宇宙博物館に行きます」

「どつちが誘ったの？ 言いなさい」

ここで織絵さんの時と同じくわかりませんなどと答えてしまえば、鬼の形相に変わった姉さんに何をされるか想像するだけで身震いがします。目覚めのお尻パンチが強力の威力で放たれ、洗顔剤を肌合わない物に変えられる、なんてことにもなりかねません。

「私が誘いました。その……」

いざ言葉に出すと恥ずかしさで頭がぼうつとしてしまい言葉に詰まりますが、ここでためらっていては次へと進めません。

「好意を持っていましたので」

瞬間、姉さんは顔を真っ赤にして立ち上がりました。

「そうよね！ 恵那にだってそう言う相手はいるものね。じゃあ私も用意しなくちゃ」

「姉さんもお出かけですか？ 久しぶりですね」

正確には覚えていませんが、姉さんが最近家を出たのは半年前だった気がします。

「そうね、あいつの誕生日以来だから。じゃあ恵那も楽しんで」

『あいつ』とは姉さんの架空の彼氏です。このような見栄を張る場面で、あいつと呼ぶ男性が出てきますけれど、本人を見たことはないですし、付き合っている雰囲気も感じません。それに一年三百六十日を家で過ごす姉さんと交際する男性など、どんな方が想像もつきません。

ふらふらと部屋を出て行った姉さんを見送って、私は途中だった身支度を済ませ、家を出ました。

外は雪がちらつき、道路の脇を白く染めています。自転車で行くには横転の危険性がありますので、青色の折りたたみ傘を取り出しシュバっと広げました。自分の手を見た瞬間に手袋を忘れた事に気が付きましたが、駅までは歩いて十分程ですし、駅から宇宙博物館も近いのでわざわざ取りに行く必要はないと判断して、家の方に向けていた体を前に向け、駅に足を進めます。

これからどんな一日が待っているのだろうかという緊張感で高鳴る

胸を、しとしとと降る雪が落ちつかせてくれ、足取りを軽くさせてくれるのです。

## 第五章 白井優

待ち合わせ時間の丁度に駅につくと、羽田は駅前のコンビニに入らず、律儀に券売機の辺りで待っていた。白いニット帽をかぶる彼女は、優等生らしさを校外でも忘れないようだ。

冷えた空気で赤くなった手を、息をかけて暖める羽田は俺の姿に気がつく、小さく手を振り、はにかむ。

「おはよう白井くん。久しぶり……だね」

「ああ、そうだな」

実は言うとき久しぶりではない、が、久しぶりでもある。久しぶりが曖昧になってしまうのは、異星人である羽田は平日の昼間に旧図書室を訪れていたからだ。

別に何かをするわけではないが、異星人は旧図書室にある異星人に関する書物を読み、わからない言葉があれば説明したり、異星人が羽田に乗り移っている事を気付かれないようにする方法を教えた。彼女が実践できているのか甚だ疑問だが。そういうやり取りをする間に俺は先輩から師匠にランクアップしてしまった。

「何か考えているようだけれど、忘れ物？」

「いや大丈夫だ、行こう」

ホームで電車を待つ間、羽田は俺に話しかける事などせず、まるで初めて見た景色といわんばかりにキョロキョロと拳動不審に辺りを見渡し、息を手に吹き掛けてはまた見渡しを繰り返した。いつのまにか異星人に切り替わったな？と思わせるくらいの不自然さだ。俺としても羽田と共通の話題などないので話しかけず、ボーツと電車がくる方向に視線を向けていた。

電車に乗り椅子に座ると、羽田はちらつく雪を窓から眺め、「寒いね」と呟いた。そして両手を強く握りしめてふともものあたりに置いた。

「どうして、白井くんは私を誘ってくれたの？」

いや、お前を誘うつもりはなかった。と言いたいところだが、それを言ってしまうと訳がわからなくなってしまう。

「なんとなくだな。羽田は何で宇宙博物館に来てもいいと思ったんだ？」

「ひえっ？」

背中に冷たい物を入れられた時のみたいに変な声を出し、羽田は俯いたまま手を動かせ、謎のジェスチャーをするが全く意味は通じない。周りの乗客もその動きでこちらに視線を集中させるので、恥ずかしくなり、「もういい、わかった」と言いつて動きを止めさせた。話を振られたのにちゃんとした答えを言わない俺も悪いが、羽田はもう意味が分からない。変な動きをして挙動不審で、これではあの異星人と変わりないではないか。

もしかして俺が異星人だからどう接していいのかわからないと思っっているのか？ それはありえる。俺だってそうだからだ。数少ない安静の場である旧図書室にほとんど毎日来る異星人を追い出せないのは、俺がただの地球人とバレることを恐れているからだ。最悪の場合キャトられて実験材料にされる可能性だってあるので下手な事は出来ない。

それは優等生である羽田も落ちついてはいられないだろう。

俺のせいで大晦日に時間を使わしているのだから、楽しませる事はできなくても、せめてリラックスはしてもらいたい。

「羽田、落ち着け。俺はお前をさらったり、食ったり、危険な事をするつもりはない。ただ、いち地球人としての宇宙に関する意見を欲しいだけだ。宜しく頼む」

「えっと、はい。わかりました」

俺の言葉の影響かどうかまではわからないが、羽田の表情は若干柔らかくなり、正面に座る赤子を抱えた女性に話しかけていた。

「何ヶ月くらいでしょうか？」

「もうすぐで一ヶ月よ」

「かわいいです。動物みたい」

その発言はどうかと思うが、母親には受けが良かったようで一気に距離が縮まり、羽田は母親の方に行くと、赤子を抱いてこちらに戻ってきた。

「白井くん、どうですか？ 可愛いですね」

「か、かわいいか？」

猫や犬の赤子を見れば可愛いと思えるのだが、人の赤子を見て可愛いと思えない。羽田の意見と同じで人とは思えず、少々気色悪い顔のシワとか髪の毛の薄さで少しひいてしまう。

「かわいいですよ？ 抱いてみます？」

「いや、落とすと怖いからいい」

「そんなこと言わずに。温かくて湯たんぽみたいですよ」

「いやいや、人の子を物扱いするな」

などというやりとりをしていると母親はぶつところであいらしい笑い声を上げた。

「睦まじいカップルね。羨ましい」

「えっ、いや。そういう関係ではないです」

一瞬の間も与えず羽田は言い返し、怒ったのか顔を赤くして赤子を母親の元に帰しに行った。

そりゃ異星人と呼ばれているような奴が彼氏と言われれば嫌だろう。

気を悪くしたのか、羽田は電車を出てから口を開く事は無かった。

## 第六章 羽田恵那

私は何をしているのでしょう？

話したいことはいくらでもあるのだけれど、散らかった私の思いは容易くそれを探してはくれません。あれやこれやと湧き出る言葉を紡ぐ前に諦めてしまうのです。

白井くんはその話しを聞いて気を良くしてくれるのだろうか？  
気を悪くしないだろうか？ そのようなことを考えてばかりなので  
当たり障りの無いことしか聞けません。

白井くんの事をもっと知りたいのに。

このような機会は滅多にないのに。

電車では会話を探そうとしているときなり白井くんからの異星人発言で混乱し、咄嗟に赤ちゃんを抱いた女性に話しかけ、可愛い  
ですねなどと声をかけた自分が憎いです。確かに赤ちゃんは可愛らしい  
のですが、可愛いから声をかけたのではなくて、赤ちゃんをきっかけ  
にして白井くんとまともな会話ができればと思ったからです。  
汚い。

自分の感性を否定されるのが怖いからと言って、第三者の手を借りるとは愚行もいいたころです。進歩の可能性すら伺えません。さらに女性の「カップル」という言葉に感激して舞い上がるなんてどうかしています。

気になります、白井くんがその言葉で私の事をどう思ったのかが、  
まだ白井くんと会って三十分少々なのにこれほどまで落ち込み、  
これからどうすればいいわからず一寸先は闇と言いますが、もう闇  
に陥っています。

落ち込みながらも顔には出さないようにして歩いていると、ふと  
足下にふわふわとした感触がしたので見下ろします。そこには首輪  
のついた柴犬が尻尾を振って私の横を歩いていました。

辺りを見渡すと整備された道路に木々と草花が植えられ、ベンチ

が点在しています。どうやらここは公園で、その中に宇宙博物館が建てられているということでしょう。そしてこの柴犬も散歩中なのでしょう。

少し屈んで頭を撫でると嬉しそうに目を瞑り、舌で指先を舐めてきました。冷たくなっていたので暖かい犬の舌は少し気持ちいいです。

「おっ、犬か」

少し先を歩いていた白井くんも柴犬に気付いたようで、こちらに近づいてきます。そして白井くんと柴犬の眼が合った瞬間でした。

さつきまでぬいぐるみのようにふわふわして可愛く、人懐っこい粗相をみせていたのに、地鳴りのような低いうなり声をあげ、白井くんを睨みつけたのです。豹変して大きな鳴き声で威嚇する柴犬を落ちつかせようと顎の下辺りを撫でますが効果はありません。

「やっぱ、可愛くないな」

そう言って白井くんは前に向き直しとぼとぼと歩いて行きました。  
「あっ、白井くん」

待ってという言葉は出せず、大人しくなった柴犬を撫でながら先を行く白井くんを見ていました。その後鳴き声で気付いたのか飼い主の方がすぐに現れ、軽くおじぎをすると縄を付けて去って行きました。

私の小さな自慢として、子供と犬に好かれるという物がありました。今日に限っては全く嬉しいものとはなりません。白井くんは犬に嫌われたと思って傷ついたのかもしれませんが。

どうしてこう悪い方へと事が進むのでしょうか？ 私だって好きで柴犬に好かれたわけではないのに。

もう帰りたい。

## 第六章 白井優

俺は幼い頃から動物に嫌われていた。そこらの犬や猫は俺を見ると吠え、飼育小屋にいる鶏や兎はえさを持って行くと小屋の隅で固まるのだ。平等に接してくれるのは金魚と亀という死んだ様な眼をした魚類と八忠類くらいだ。

だからと言って、犬に吠えられても傷つく事はない。もう慣れたのだ、そういうことに。だが、さすがに逆の立場にある人間、羽が犬に尻尾を振られる姿を見ると、若干胸の辺りがぬめめるような感触を覚え、直視は出来ない。

何故そこまで嫌われるのだろうか？ 家庭環境が悪いからか？ 知らず知らずに殺気を出してしまっているのだろうか？

そんなことを考えながら羽田の先を歩いていたのだが、犬と戯れていたであろう羽田が俺の横を駆けて行き「すごい」と声をあげていた。

どうしていきなりテンションを爆上げさせたのだろうかと、彼女の視線の先を見ると答えはそこにあった。

公園の木々の隙間から見えるロケット。

「すごい大きい」

「そうだな」

「……本物？」

十メートルを優に越える立派なロケットを見て戸惑う羽田の表情は子供らしくて少しおかしい。

「ほとんど本物だが一部は作り物らしい。見えないか？ ロケットにユニテッドステイトと書かれているだろう」

「……目がいいですね。字が書かれている事は分かりますけれど、そこまでは」

それからしばらく歩き、宇宙博物館の姿が見えると今度は笑い声を上げた。

「すつごーい。UFOだ！」

もはや爆笑の域に入るくらい、座り込んで膝を抱え、それでも笑いをこらえようと俯くが体は細かく振動している。

「そんなに面白いか？ いいフォルムじゃないか？」

「……いいフォルムって、あれくらい私でもできますよ師匠」

いやいや、いくら万能で成績優秀な羽田であっても、あのような突飛な建築物を考える事は……？ 今、師匠と呼ばれた気がしたが、もしかして幼稚園児のみたく無邪気に駆け回り笑う彼女は……。

「異星人か」

「……何を今更？ 早くしないと！ 一時間しか時間はないのですから」

宇宙博物館に向かって駆けて行く彼女を追って、俺も後ろから追いかけて行く。

「もしかして今日の時間を全て博物館に費やす気か？」

「……もちろん。地球人の重要な場所だから師匠はここに誘ったのでしょ？」

確かに地球人が調べた宇宙に関する大事な資料や資材がある場所だが、ぶつちやけていえば、地球人にとって宇宙など玩具つきお菓子の玩具くらいでしかない。宇宙など知っても知らなくても生きていける。けれどもその不思議を知っていたという好奇心が生んだ学問だろう。

特に宇宙に興味がない俺でもその気持ちは理解できる。それは、ただこの異星人のことを知りたい為に、宇宙博物館を選んだ気持ちと同じだろう。

建物の中に入ると白い壁紙に黒い壁のフロアが広がり、正面にはチケット売り場、その横にエレベーターがある。そしてその隣には宇宙博物館にふさわしい乗り物、ルナローバーが置かれている。よくテレビなどで映る、傘の形に似たアンテナを付けた天井のない四駆の様な車だ。

チケット売り場で更年期を迎えたであろう受付嬢に三百円と引き

換えにチケットを貰うと「こちらです」と博物館の入り口を示してくれた。

博物館は二階にあるのだが、そこに繋がる階段はなく、エレベーターのみというなんとも非エコな構造となっている。

いつのまにか俺の右隣から消えている異星人を捜すため、きよろきよろフロアを見渡すと、ルナローバーに乗り、ばんばんとハンドルを叩いている彼女を見つけた。

「こらっ！ 乗ってもいいがハンドルとボタンにはさわるな！」

「なんで？ 乗り物でしょ？ デパートにあるパンダと一緒にでしょ？」

子供の為に遊具用のルナローバーを作れば面白いかもしれないが、ここは博物館だ。そもそもデパートとは趣が違う。

「そのハンドルの横を見てみる、『さわるな』と書いているだろ？」

ハンドルを握りながら視線を下ろして注意書きを確認した彼女は、モデルガンと違っていたら本物の銃だったかのような反応でハンドルを素早く離し車から降りた。

「時間もないんだから早く行くぞ」

エレベーターのスイッチを押し、彼女を手招きする。

「このエレベーターはひと味違うぞ」

「……？ それは楽しみです」

この博物館のエスカレーターに乗り、驚く姿を想像すると自然と笑みがこぼれてしまう。

チンと安っぽい鐘の音が鳴るとエレベーターが開き、中に入って二階のボタンを押す。そしてドアが閉まった瞬間だった。

エレベーターの中が真っ暗になり、足下から天井まで星屑で埋め尽くされた。

まるで宇宙空間に放り出されたようだ。

「どうだ、面白いだろ？」

「……………」

わー、すごい。などといったリアクションを期待していたのだ

が、彼女は呆然としてエレベーター内を見渡していた。

「これが噂の宇宙エレベーターですか？」

「はあ？」

「……人類は宇宙までいけるエレベーターを作っていると恵那の記憶にあります」

「いや、これは偽物だ」

これはただ、宇宙博物館だから雰囲気作りをしただけで、星の壁紙を貼った人も、宇宙エレベーターを意識して作ったわけではないだろう。

「……偽物？ つまりそれは遊び心？」

「そうだ、よくわかったな」

「……はい。日々勉強していますので」

それは羽田の脳内の記憶を探っている、という事なのだろうか。想像すると怖くなり寒気がしたので深く考えない事にした。

再び「チン」と安い鐘の音が鳴ってドアが開いた。「着いたぞ」と言った瞬間に彼女は飛び出し、めばしい何かを見つけたのか駆けて行く。

薄暗い館内には町中では絶対見られない様な奇怪な形をした宇宙船や人工衛星、入り口にもあったルナルバーなどが所狭しと置かれている。

これらは宇宙で使われる予定だったが計画が変更になり使われなかった物や、本物と同じ部品で作られたレプリカなど、本物と遜色のない物が二十点程展示されている。

駆けていった異星人は円形の宇宙船の所において、熱心に説明書きを読んでいる。

「どうした？ この宇宙船が気になるのか」

「……いえ、ただ基礎ができていますかと思ひまして」

「基礎？」

まさかこの宇宙船を見ただけで内蔵や作りを理解したというのか？ だとすればさすが異星人だ。文化レベルが違う。

「ええ、基礎です。これほどまでに綺麗な円形が作れるという事はさぞかし、複雑な形に変化できる事でしょう」

「変化？ これはそんな戦隊ロボみたいにならないぞ」

「……？ 千体ロボ？」

「いまいち言葉の意味をしていないらしい彼女は首を傾げる。どうやらもつとわかりやすい例えをしないと理解が出来ないらしい。

「この宇宙船はお前みたいに変化しない」

「……えっ、そうなのですか。てっきり同類かと思っていました」

「同類？」

「……はい。つまり異星人の意識の塊ですね」

「違う、これはそもそも機械だ」

そう言っただけは彼女の手首辺りを握って引っぱり、ある標本の前まで来て指差した。

「うわっ」

異星人の感性でもそれを気色の悪い物だと感じたのか、見て取れるようにげんなりとした表情を見せた。

「なんですかこれは？ ヒトの形をしていますか……もしかしてゲルとヒトを合成した物？」

ゲル人間になって果たしてメリットはあるのかは疑問だが、例えとしてはあながち遠くはない。

「これは半世紀前くらいにアメリカでUFOが墜落して、その中から発見された宇宙人の死体を見たって人がいて、その人が描いた宇宙人の模型だ」

幼児のように頭が大きく手足が短く、腹が妊婦のように出ていて肌の色は青白い。耳は小さく、眼はグレイタイプのように大きくなく、細く小さくて外国人の雰囲気がある。

「……こんなに気持ち悪くないよ、わたし達は！」

「気持ち悪いどころより、人間はUFOを乗り物だと思っていて、宇宙人だとは思ってないんだよ」

「……なるほど、人間のほとんどは大きな勘違いをされているので

すね」

「その通り」

そう言っただけはすぐ隣にあるUFOの写真がパネル展示されているコーナーを指差した。どれも本物の可能性が高いモノらしく、それぞれに専門家の言葉と何型でどの場所で何年に撮ったのかも書かれている。中には映像もあり、俺も訪れてはUFOを撮る場所の参考になっている。

彼女は俺が指差すと同時にこれまた駆けて行き、熱心にUFOの写真を眺めていた。そして何やら興奮して喚いている。

「あー！ これはジユベさんじゃないですか！」

大きな身振り手振りをそれぞれのUFO写真を見ては繰り出している。これだけ良い反応をされれば、作った側はさぞかしうまい飯を食えるだろう。

しかし、どうやら彼女はそれぞれにカタカナ的な言葉を叫んでいる。

「おお、これはミツシャン！ 久しいよっ」

ほら。ジユベやらミツシャンやら……大体の予想はつくが訊ねてみた。

「何を大声出している。係員に見つかったら注意されるぞ」

「……だ、だって、師匠だって気持ちわかるでしょう？ こんな写真を目にすれば気持ちだって高鳴ります。これなんて特に！」

そう言っただけで異星人が指差したのは五年程前にブラジルで撮られたUFOだった。蜘蛛のようにたくさんの足があるような形をして上空に佇んでいる。

「これがどうした？」

「……師匠は有名人に興味がない方ですか？」

「そうだな。あまりないな」

テレビもスポーツもワイドショーにも興味がなく全く観ないので質問の答えとしてはあっているだろう。異星人の有名人には興味が湧くが。

「……あのテフィを知らないなんてどうかしてます！」

「どうかしていて結構」

「……その他の写真にも星の知り合いや友達が映っていて少し感傷的になってしまいます」

「そうか……帰りたくはなかったりするか？」

なぜこんな追い打ちをかけるような事を訊いてしまったのだ、という後悔を口に出した瞬間に思ってしまったが彼女は小さく笑ってみせた。

「そんな気持ちがないわけではないですが、大丈夫です。すつごく楽しいですよ。師匠のお陰です」

「俺のお陰？」

「……ええ。コーンフレークくらいしか良い事がないのかもしれないけど、同じ星の先輩に色々教えてもらいながら過ごす毎日と同じくらいの価値があります」

コーンフレークと同じ存在感と言われ喜んでいいのかという戸惑いもあったが、もしも彼女に俺が異星人ではないと気付かれた時の事を考えるとそれ以上の空しさがあった。俺は嘘をついて彼女を喜ばせている。付き合わせている。それも中々の大嘘だ。

「すみません白井くん、お手洗いに行ってきます」

そんなことを考えていると、彼女はそう言つてまた駆けて行った。

……いや、今のは羽田であつて異星人ではない。

## 第七章 羽田恵那

どうやらまた私の記憶は途切れてしまっていたようです。無意識の私が白井くんと戯れていたに違いありません。

しかし、どうしてなのか、ほっと安心した気持ちと、ぎすぎすとやすりで研がれた様な胸の痛みがあるのです。

ほっと安心する気持ちは理解できません。

白井くんを退屈させないような振る舞いが出来るのか、おかしな表情をしていないか、白井くんを怒らせる様な、不快にさせる様な言葉を発していないか……など、考えればきりが無いほどの注意点を抱えたまま過ごす時間をいくらかは消化できたからでしょう。

ただ、その時間が苦痛かと訊かれれば、頑として否と答えられま

す。

彼といる時間は楽しいとは言えません。自分の情けなさ、彼に対する知識の無さで悲しくなります。けれども、それを越えて、白井くんの笑顔、機嫌の良い声色、柔らかな雰囲気を感じることがさらなる幸福をもたらしてくれるのです。なので白井くんといふことは苦しくもありませんが、それよりも嬉しさの方が大きいのです。いえ、まだ経験してないのでわかりませんが。

しかし、この胸の痛みは何でしょう？

私の無意識さんは恐らく無事に二人の時間を無難にこなしてくれただけに違いありません。もし退屈しているのなら、白井くんは私の隣ではなく、離れて行動していたに違いありません。なのである程度充実した時間を提供できているのです。私の無意識は。

ならば、どこに胸の痛みを抱える訳があるのでしょうか？

私の意識ではなく、無意識が行ったから？ そうだとすればその痛みはお門違いも甚だしい。無意識は私でないようであって、私なのです。

思い返してみれば良い、記憶をなくす前までのあの体たらくを。

ろくに会話もせず、何も出来ず、人の力を頼って、そして悲しい顔をさせて、駄目が幾らあっても足りない始末だったではありませんか。

そのような私が無意識に嫌悪感を抱く何ぞ言語道断なのです。

けれど、これからの時間は無意識ではなく私自身で彼を満足させなくてははいけません。どのような振る舞いで退屈させないようになればいいか。不快な気持ちを抱かせないようにするか。それを考えながら尿意を解消し、ドアを開けた。

## 第七章 白井優

羽田がトイレに行っている間、何で暇をつぶそうか辺りを見渡すが、どれももう説明文まで暗記してしまった展示物なので見る気が起きず、ベンチで腰を降ろそうかと思つてしていると、正面からやたら足を踏みしめて歩いてくる女性を見つけた。まるで靴が石でできているかの様にドスリとした歩調だ。

誰かに似た顔をしている。なんて事を思つて顔を見ていたら女性は俺の眼を見ながら歩いてきた。一時も視線を離さない。もしかして好かれたのか？ などと考える奴は恋愛感情を勘違いした馬鹿者であり、俺はその馬鹿者ではないので女性の今の感情を汲み取れる。眼を大きく開き、歯を食いしばり、何度も言うが大股で無駄に床を踏みしめながら歩く彼女は間違いなく、怒つている。逆ナンといった雰囲気では断じてない。第一声は「なに見てんのよ」に決まっている。

その言葉に対し、すぐ謝ればいいのか、お茶を濁せばいいかと考えていると、彼女は俺の顔の距離二十センチ辺りで立ち止まり口を開いた。まだ言葉が耳に届かないにもかかわらず、顔に唾がかかる。謝ろう、すぐにすみませんと謝ろう。

「あなたのことが好きです」  
「すみません！」

……………へっ？ いくら彼女が変な歩き方をしたとしても、見すぎたことにより気を悪くしたならば、謝るに限ると思つたのだが…  
…いや、この答えはどちらにしる間違いではないが、彼女が発すると思つていた言葉が真逆だった。まさかのまさかだ。

「パンツくらいならみせるから」

「いや、いいよっ！」

「パンツくらい幾らでもあげる」

「いや、結構です」

そう言ったのだが、彼女はいきなりスカートの中に手を突っ込んだ。

「だから、いいですって！」

「結構です、いいですって欲しいですってことじゃないの？」

何故か声に怒りの感情が交じっている。そうしたいのはこちらの方だ。この淫乱女め。

「高校生なんて女のパンツや胸にしか興味ない年頃だろ、嘘付くな！」

「とんだ偏見だ！」

興味が無いと言えば嘘になるがこんな見せられ方は嫌だ。何事も時間と場所と場合が大事だ。

「なら尻が好きなのか！ いくらでももませてやるよ！」

しかしこの女性は全くわかってくれない、気付いてくれない。大声で淫乱な言葉を吐き、時よりすれ違う数少ない来館客に白い目で見られ、係員は無線機で連絡を取り合っている事を。このままでは俺まで注意され、追い出されてしまいかもしれない。どうにかして話を付けないと。だが何と言いつ返せば良い？ もませてくれと言えば黙るのか？ いや、誰かもしれないネジやたかが外れた女に触れるなんて、気味が悪い。

そのようなことをうたうだと考えている間に事を済ました羽田が淫乱女性の背後に見えた。その瞬間、羽田の口が開いた。

白井くん、その人だれ？ といった類のことを訊かれるのだろう。知るか。こつちが訊きたい。しかし意外にも羽田の口から出た言葉は俺の疑問を解決した。

「どうしたの？ 姉さん」

その言葉を聞いて正直驚きすぎて反応する事が出来なかった。

どこか見た顔だと思ったのは、よくある平均的な顔、という訳ではなく、羽田恵那に似ているからだ。二人の顔を見比べると、目元と鼻筋がほとんど同じである。顔の色は……姉が紅潮しているので比べる事は出来ない。

「恵那……」

しかし、姉が羽田と目を合わせた瞬間みるみるうちに顔は青白くなり、貧血になるのではないかというくらい顔色が悪くなっていた。

「もしかして白井くんと知り合いました？」

その問いで姉は肩をびくつかせ、顔を引きつらすと俺をジロリと鈍器の様な視線で睨みつけた。そしてこちらに駆けてきて思い切り前蹴りを喰らわし「バーカ、テメーなんか死んじまえ！」と逃げ台詞を吐いて去って行った。

前蹴りにそれほど威力はなかったが、倒れ込んでしまった俺は何が起きたのかわからず、少しでも原因の糸口を探そうとその背中を見ていた。すると、すっと目の前に手が伸びてきたのでそちらに視線を移した。

「ごめんなさい、白井くん」

手を取るとグツと引き上げてくれた。女の割りには軽々とこなしてみせたので中々力が強そうだ。

「ああ、大丈夫だ。ところでなんだアレは？」

羽田の姉さんが駆けて行った方を指差すと、羽田はみるみると表情を弱々しい小動物のように変え、今にも泣き出しそうになってしまった。

「ここでは何なので、レストランに行きませんか。ちょうどお昼ご飯の時間なので」

館内の三階にあるレストランは宇宙船の内部をイメージして作つたらしく、五角形の筒の中みたいな内装は白色に覆われていて、点々とある丸い窓からは宇宙館の横にあったロケットが見える。置かれてある机や椅子は鉄で出来ていて、椅子は球の様に丸く、座る部分だけ凹んでいる。机は『どんな感じか説明！』

普段着に『宇宙レストラン』と白い字で書かれた緑色のエプロン

を巻いた中年のおばさんが席まで案内する。いくら休日で飯時とはいえ大晦日なので客は少なく、三組くらいしかない寂しい状況だ。メニューを羽田に渡すと、俺にも見えるようにと中央で横にして広げた。俺は何度も来ているので、メニューも見ないでいつもと同じ『UFOカレー』を選んだ。UFOと付くが、味が変わるわけではなくただご飯の盛り方が円盤状になっているだけだ。

他にもUFOと付くメニューは、ミートスパゲティ、ラーメン、オムライスがある。ミートスパゲティは何がUFOなのかかわらないが、ラーメンは商店街にある店と同じようにかまぼこにUFOのイラストが入っていて、オムライスはケチャップで円盤が描かれている。とまあ、UFOだからと言って大した変化はない。

羽田はUFOシリーズではなく『宇宙食セット』を選んだ。ランチタイムなのでドリンクが付き、俺はコーヒーで羽田はオレンジジュースにした。

店員が席から離れると羽田は姉の話しを始めた。

「先ほどは失礼しました」

「いや、いいさ。お前じゃないくて姉さんがした事だし」

「ありがとうございます……。ところで白井くんは本当に姉さんと知り合いではないのですね？」

「ああ、知らん」

「その……インターネット場でも知り合った事は？」

「ない。俺は動画や画像を見るくらいでしかネットを使わない」

表情の見えない相手と接するなど違和感を覚えて仕方がない。だから電話もメールも好きではないのだ。

「ではどうしてこんなところに……白井くんは姉さんに何か言われましたか？」

「好きだ、胸をもめ、尻をもめ、この三点だ」

変に隠せば姉妹という間柄だとすぐに綻びが出そうなのでありのままを伝えたのだが、羽田は顔を紅潮させて、顔を隠すように手で頬を覆い、少し俯き、消え入りそうな声で言った。

「なんてことを……本当に恥ずかしい。申し訳ございません」

「そんなに誤ってくれるな。まあ、変な姉だが、中々に面白い思いができた」

「そうですね……。それで、あの」

羽田は言い辛いのかごにょごにょとはつきりと口にせず、指の間からちらりと俺の顔を覗いている。

「気になる事でもあるのか？」

「そ、それはあります。本当に姉の……」

「胸か？ 尻か？」

「い、いえ。そうではなく」

「ということはこれしか残っていない。」

「好意に答えたのでしょうか？」

「答えるはずがないだろう。訳のわからない女性にいきなり訳のわからないタイミングで告白されて。それに俺は」

「異星人ですもんね」

その通りと俺はコクリと頷いた。

「ですが、なぜ知りもしない白井くん、姉はそのような行為に及んだのでしょうか？」

口に水を含み、少し考える。

俺を好きだと言って、体に触れさせようとし、逃げるようにして繰り返した前蹴り。それらをふまえ、すぐに思いつく理由は一つある。

「羽田は姉と仲が良いか？」

「うーん。比較対象がないのでわかりませんが、私は姉に対し、嫌いな所もあれば、好きな所もありますので普通かと。けれど、姉さんは何かと私と共に行動しようとする傾向があるので、どちらかといえは好きなのかもしれません」

「では決定だ。羽田姉は羽田が男と遊ぶと知り、それが気に喰わなくて男に攻撃をしたのだろう」

羽田は首を傾げながら視線を流し、窓からロケットを見つめた。

「攻撃とは色仕掛けのことでしょうか？」

アレを色仕掛けと言っているのかかわらないが、羽田姉はそれを意識した上での行動だったのかもしれない。

「そうだ。知らない男に妹を取られたくなくて馬鹿な事を行ったのだろう。告白して良い返事をもらえれば男は妹の物にはならないし、男が姉の体をさわっている所を見れば？」

「え、えっと。失望します」

「だろ？ それが答えだ。そしてどれも上手くいかなくて腹が立ち、俺を蹴って逃げたのだ」

「そうでしたか」と呟き、羽田はため息を吐いて落胆した。が、すぐに笑顔に戻し明るく振る舞う。

「さすが異星人だけあって観察眼に優れていますね。白井くんの推理で間違いないでしょう」

けれど一つ腑に落ちない点がある。

「自分の身まで投げ出すまでする必要があるだろうか？ 過保護な親ならわかるが、姉ならばそこまで神経質になるとは考えにくい」  
「年が親子程離れていれば別だが、見た目では五つくらいしか違わないように思える。」

「それは、ええ。心当たりはありますけれど、姉の事情もあるので言えません。本当にすみません」

姉の事情とやらは気がかりだが、羽田が言い終ったと同時に料理が運ばれてきたので、続きを切り出せ辛くなり、食べる事に集中した。これ以上場の空気を湿らせると飯の味が変わってしまう。それにそこまで深く羽田の家庭を知りたいわけではない。

テーブルの上には羽田の宇宙食セットと俺のUFOカレーが並んだ。羽田の表情を伺うと絶句していた。それもそうだろう。宇宙食セットとして置かれた物は小さなポットとアルミの袋が三つと密封された透明の袋に入ったインスタント麺だけだからだ。

羽田の驚く気持ちはわかるが、そもそも宇宙食は調理する必要がない物だからレストランにある時点で可笑的い。ラーメン屋にイン

スタントラーメンがあるのと同じくらい変だ。

アルミの袋にはそれぞれ鮭と高菜のおにぎりの表記と写真が貼られていて、もう一つは杏仁豆腐のイラストが入れられている。

宇宙食セットなどと大それた名前をしているが、実際はそこらの中華料理店のラーメンセットとは皮肉な物だ。

羽田は袋の裏面に書かれている作り方を見ながら、袋にお湯を入れ箸で具をかき混ぜちゅるりとすすった。

「うまいか？」

もぐもぐとしっかり噛んでから羽田は口を開いた。

「少し濃いけれどおいしいですよ。でもラーメンを三度しか食べた事がないので参考にしないで下さい」

俺にとつては宇宙食セットよりも十七年生きてきてラーメンを三度しか食べた事がない方が驚きだ。海外に住んでいたならまだしも生まれも育ちの日本人では彼女くらいではないか？ 俺なんてカツブ麺を含めれば週に四回もラーメンを食べている。これが貧富の差なのかもしれない。

「白井くんのカレーライスはどうですか？ UFOと言うからには何か特殊な味付けはされているのではないですか？」

「ないない。どっちかと言えばレトルトのボンカレーの中辛に近い味だ」

近いと言ったが心の中では実物だと思っている。

「ボンカレー……ですか」

「これも食べた事ないのか？」

「ええ、レトルトやインスタントというものを母は嫌うので」

「そのくせコーンフレークはいいんだな」

「そうですね、少し変です……あれ？ どうして私の朝食がコーンフレークだと知っているのですか？」

「え、そそれはだな」

そういえば羽田から直接コーンフレークが朝食だという話しは聞いていない、ただあの異星人がコーンフレークを好きと言っていた

ので、羽田の家ではコーンフレークを食べるのだと思ったただけだ。しまった、ここで交友関係の浅さが響いてくる。比較的仲の良い寺内は情報屋として校内で通っているからそれを理由にできるが、なぜ羽田の朝食の話しを寺内としなくてはならないのかという理由がない。何も理由がないので俺が異星人という理屈で強引にわかつたと押し通すのもアリと言えればアリなのだが、信憑性を一気に下げたしまう可能性が高い。数少ない俺を異星人だと思っている人間だ、出来る限り減らしたくはない。

そんな俺の苦痛の表情を見て羽田は何故かニヤニヤしている。意外と意地悪な性格なのか？　だが、嫌いではない。いい子を演じ、言いたい事を胸にしまっ顔よりも、こちらの表情の方が好感を持っている。

「何を笑っている。俺が困るとそんなにおかしいのか？」

「……可笑しいですよ。せ、白井くんの変な顔は」

そう言うって笑いながら羽田はインスタント麺に箸をのばす。これは気にし過ぎなのかもしれないが、羽田の箸の扱いが若干雑になったように感じる。笑っているからか？　今まで気付かなかったが、比べてみれば差は歴然としている。さっきまでの羽田は体の一部の様に箸を扱っていたが、今の羽田は体の異物のように扱っている……。今とさっき、例え笑ったせいで体が震えているからと言っても何度も麺を持つては落とし、持つては落としを繰り返す程にはならないだろう。

と、なれば答えは一つ。

「あつ、コーンフレ」

クだ、と隣の席に指を指す前に羽田は俺の顔を凝視した。

この瞬間決定した。羽田は羽田でないと。

「いい度胸をしているな。先輩をからかうとは」

口まであと少し、という所で麺を落とした彼女は半笑いでこちらを半見た。

「わかりましたか？」

「理由を言え、理由を」

「……そ、それはですね」

箸を置き俯きながら彼女は秒針の音くらい小さな声で言った。

「人として先輩と関わればどれくらい違うか知りたかったからです」

「意味が分からない、羽田ではないとすれば時間は消費されるのだらう？　ならゆっくり喰っている暇はない。羽田に戻るかさつさと喰え」

「……わ、わかりました」

そう言ったのだから羽田に戻るのかと思っていたが、彼女はテールを汚しながらも忙しなくインスタント麺とおにぎりを頬張り、五分もしないうちに完食した。

「ごちそうさま。まずかったです」

一言多い。

昼食を終えた後、時間が来るまで展示コーナーに戻って、宇宙船やらを見て回った。時間と言うのは彼女が異星人でいられる時間ではなく、プラネタリアムの上映時間だ。

この建物はUFOの形をしていて、それを利用したのかどうかはわからないが、最上階は丸い天井になっているのでそこに星空を映すのだ。

「ねえねえ師匠。あれは何ですか？」

人がプラネタリアム気分を高めていると言うのに、彼女はかまわず質問を浴びせる。指を指す方向には惑星探査機の人の頭サイズくらいの模型が置かれていて、説明文も載っていた。が、俺は月に三回はこの博物館に来ているので大体何が書いているか覚えている。

「あれはだな、宇宙に放ったスピーカーみたいな物だ。地球人は太陽系のどこそこにありますよ的なメッセージを衛星から電波で発信している」

異星人である彼女が知らないのだから、この作戦は失敗している

のだろう。

「この衛星は地球に戻って来られるのかな？」

「いや、そういう風に作られてはいない」

「……そうなのですか」

彼女は気のない返事をしてとぼとぼと足を進め違う展示物に向かって歩いて行った。

それからの彼女は何か嫌な事や気がかりな事を思い出したかの様に、落ちつかない様子だった。俺が展示物について話しをしても「そうですか」と「へえ」の二種類しか言葉を返さない。どこに原因があったのだろうかと思いつ返すも、異星人の事なのでもしかすると感情のスイッチが違うのではないかと思い、ならば考えても仕方がないので思考を停止させた。すれ違う赤子にも彼女の機嫌の悪さが伝わったのか、それとも彼女が他の星から来たことに気付いたのか、彼女が赤子の横を通る度に、泣き声を上げたのだった。

先ほどの動物に懐かれていた羽田とはえらい違いだ。

プラネタリムの時間が来てホールに入っても彼女は口を開かなかった。

斜め二七〇度くらいの椅子に、横になる感じで座り、暗い天井を見つめる。ホール内は薄暗くて人も少なく静かなので、山でUFOを探してほとほと疲れて寝転がる時のような錯覚を抱く。

「お待たせいたしました」という女性のアナウンスが聞こえると一斉に天井が星空に変わる。隣をちらりと見ると少しだけ彼女の表情が明るくなっていた。

「プラネタリウムは初めて。恵那の記憶にもないから新鮮です」

天井に広がっているのは十二月の星空らしく、こいぬ座のプロキオン、おおいぬ座のシリウス、オリオン座のベテルギウスが冬の第三角を描いている。というのは俺の知識ではなく、アナウンスされる情報だ。さらっと説明を終わらせ、今回はどうやら大三角の左上に位置する双子座の解説をしてくれるそうだ。双子座といえば十二星座占いで俺の誕生日に該当するので、身近に感じつい耳を傾けて

しまつ。

昔々、神であるゼウスはスパルタの王妃レダを欺き、四人の子を  
生ませた。そのうち長男のカストルと長女のクリュタイムネストラ  
はレダの夫の血を引いて、人間として生まれたが、次男のポルツク  
スと次女のヘレネはゼウスの血を引く不死身の体として生まれた。  
人と神の血をそれぞれ引いた兄弟であるカストルとポルツクスは仲  
が良く、冒険などにも出かけたという。成長した二人はスパルタの  
有名な勇者になっていましたが、あるとき叔父の娘をさらひ妻にし  
た事で、従兄弟と争いになります。その末、勝利しますが、人間で  
ある兄カストルは死に、不死であるポルツクスは残され嘆き悲しん  
だ。それを見かねたゼウスはポルツクスを天上界に連れていき神の  
一員に招き入れようとしたが、彼は兄と一緒にいいと、この話しを  
断った。するとゼウスはその願いを聞き入れ、彼の不死をカストル  
に分け与えたのだ。そうして兄弟は一日置きに神として天上に、人  
間として地上を歩き来して星になるまで楽しく過ごした。その星が  
双子座と伝えられている。

その神話が終わると空は徐々に明るくなり、天井から星が消え、  
仄明るい橙の照明がホールを照らした。

一言も話さず、神話に耳を傾けていた彼女に目をやると、まだボ  
ーッと天井を眺めていた。先ほどの星空を名残惜しむように。

「終わったから行くぞ」

声をかけたが、反応はない。顔を覗き込むと薄い唇がゆっくりと  
動いた。

「師匠。私達とプラネタリウムって似ていませんか？」

「へっ？」

唐突な質問に素っ頓狂な声を思わず出してしまふ。

「……星が人間で、ナレーションが私達。それを見ているのが私達  
の育て人というところがすごく似通っていると思うのですが」

異星人の事情など全く知らないので意味がさっぱりわからない。

「お前の見解を聞かせてくれ」

「……はい。私達を作った人達は、この地球が元の母星だったと言います。地球の気候の変化に耐えられなくなって出て行った元地球人は、自分たちが離れた後の人類が気になるので監視することになりました。そこで生み出されたのがわたし達ですよ。そこまで言えば、もう理解は出来ると思いますが」

ここは何か相槌をいれる場面だったのだろうけれど、彼女の話す事が、その意味に衝撃を受けすぎて何も反応できず、ただ口をぽかんと開けて彼女を見つめる事しか出来なかった。

「先輩？ 聞いていますか？」

「……あ、ああ。聞いている」

「……本当ですか？」

少しむくれて彼女は微笑む。

「これは思いつきですけど、さっきの星の話はもしかすると私達が作ったかもしれないですね」

あれこれと思いつく限りを考えたのだが、彼女の意図する事を理解できないが、「かもな」と、先輩らしい適当な相槌をして手を伸ばした。彼女はその手をじっと見ている。どうすればいいのかわからないと困った表情をして。

「手を出されたら手を取ればいい」

一瞬の沈黙の後に彼女は頷き、俺の伸ばした右手を握った。

当たり前の事だけれど暖かく、そして思ったよりも柔らかく羽毛のような手をグツと引き、体を引き寄せた。

「これは楽ですね。力いらずですね」

「はいはい、わかったわかった」

「……それに温かいです。恵那も寒いと思っていたならこうすれば良かったのに」

そう言う彼女の手をすぐに離そうと思ったのだが、力が入っているので振りほどく事も出来ず、そのまま手をつなぎながらプラネタリウムを出た。携帯電話で時間を見ると彼女のタイムリミットまであと五分足らずだ。

「もう観たい物はないか？」

「……ありますよ。でも今日で全てを観ると勿体無いのでまた来ましょう」

「また来たいのか？」

「……来たいですよ。師匠のエスコートは最悪ですけれどね」

「ど、どういう意味だそれは？」

何度も来たことのある場所だから迷うことはなく、それに展示物のことまで話したというのに、まだ足りないことがあるというのか、異星人には。

「……だって先輩歩くの速いですし、休憩しないでずっと歩きっぱなし、立ちっぱなしですよ。初めは先輩の中の人間がそういう気遣いのない人だと思っていましたけれど、先輩も同じです。男性と女性では筋力から何から違うのですよ。もう恵那の体は疲労しっぱなしです」

「うるさい。それくらい気を使わないで言えばいいだろう。お前のように、ああまどろっこしい」

「……それが人間の女性と言うものではないでしょうか？ いわゆる乙女心ですよ」

「へいへい。俺が悪いですよ、ごめんなさい」

「……感情がこもっていません！」

「お前に言われたくない」

などと言い合いをしながら博物館の出口に付くと、その付近で立っていたスタッフから「少し早いですがお年玉です」と言っただけの袋を渡された。中身を出すと金銭やチケットではなく、キーホルダー型の宇宙人探査機が入っていた。楕円状の黒いプラスチックをしていて、中央にグレイ型の宇宙人が描かれた透明の丸いプラスチックがはめ込まれている。機能的にはうそっぱちのランダムで真ん中のプラスチックを押すと赤やら青やらに光り、近くに宇宙人がいることがわかるというジョーク物だ。

「押して赤く光れば宇宙人が近くにいてるってことですか？」

「そうだ。これで本当に赤く光ればすごいな」

彼女は空いた左手で真ん中のボタンを押した。すると赤から黄色、橙と色を変え、最終的に赤く光ったのだった。

「こんなおもちゃで存在が知られるとは」

絶句する彼女を横目で見ていた俺は、その姿が可笑しくて吹き出してしまった。何を笑っているんですか、深刻なことですよ。と言っている最中に彼女も笑ってしまったので、いまいち真剣さに欠け、しばらくその赤く光るキーホルダーを見ながら笑っていた。

しかし、しばらくすると彼女の笑い声が消えていて、これはもしかしてと思い彼女の顔を見ると真顔で俺を見ていた。しまった、羽田に戻っていたのだ。

「白井くん？ どうかしました？」

「いや、どうもしない、少し思い出し笑いだ」

スツと彼女の手を離し、エスカレーターのをボタンを押した。

暗いエスカレーターの中で、羽田に宇宙人探査機を押してもらったとそれは青く光ったのだった。それはつまり人間ということだ。

## 第八章 羽田恵那

初夢は悪夢でした。

小学校の教室にいる私は、小さな机と椅子に体を無理矢理に押し込み、体をきませながら座っているのです。机の上には給食。教室にはたくさんの方が並べられていますけれど、誰もいません。先生すら。けれど壁や窓の向こうからは児童達のざわつく声が聞こえてきます。笑い、泣き、話す声が。

それらを耳にしながら、私は一人、窮屈な姿勢で給食を食べるのです。

茶色のこげがついた長いパン、五目うどん、ほうれん草のおひたし、そして牛乳。どれも口に運ぶ度に嗚咽してしまいます。普段なら嫌いではない料理ですけれど、給食ということまでひどく不味く、口に合わなくなってしまいました。

パンは何の味もなく、ただ口内の水分を奪っていくだけ。うどんは暖かいつゆに何十分も浸されたままなので麺がのびきり、食感がふにふにとしてまるで良さが出ていません。ほうれん草のおひたしも同様に浸しすぎて味が濃いのです。牛乳は水で薄めたのかと思うくらいに味は薄いのですが、特有の臭みはそのままなので、臭い水を飲んでいける様な味がするのです。

どれも箸を付けたくない物ばかりですが、給食を残して教室から出て家に帰ることは出来ません。母さんに酷く叱られるからです。

早く食べないと習い事の時間に合わない、日が暮れてしまいます、誰もいなくなってしまう。そう考えた途端に背筋が凍り、一気に追いつまされた感情になって、その勢いでうどんを口に運びます。うつぶ、うつぶ、と吐き出しそうになり、口を手で押さえながらなんとか飲み込み、次はパンと牛乳を詰め込みます。牛乳の臭みが口いっぱいに広がって眼が潤んできますけれど、なんとか食し、最後はおひたしをかき込みます。胃液が出てきて口の中がすっぱくなり気分

は悪いですがなんとか食べ終わり、ごちそうさまでした、と手を合  
わせ一息ついた瞬間でした。

お皿には再び同じ料理が盛られているのです。

一食分を食べ終えたことで満腹になりましたが、まだ給食が私の  
机に置かれていると言うことは、これは私が食べなければいけませ  
ん。一食分で給食が終わりなどという決まりはないのですから。

涙ぐみながら私はまた給食を食べるのです。今度は満腹感と戦い  
ながら。

それは長い長い夢でした。普段見る夢は体感時間で長くて十分程  
度ですが、初夢は四時間くらいあったように思いました。その間、  
私は六回も給食を平らげました。最後の二時間は食べた物をもどし  
ながら食べていました。考えるだけで気色が悪いです。

そのような話を朝一番、凜と澄みきった空気が漂う晴天の気持ち  
のいい元日、しかも初詣に行く道中、隣を歩く赤い振袖が似合う織  
絵さんに話すことを出来る訳がなく、夢の断片を思い出しながらも  
やもやした気持ちを抱くのでした。いえ、昨日の白井くんとのこと  
があつて、もはや、もやもやどころではなく、もじやもじやといっ  
たところでしょうか。

タイムマシンがあればすぐにでも約束した日まで戻って約束を取  
り消しに行くぐらい、大晦日は嫌な日になったのですから。

そんなもじやもじや状態の私を見て、織絵さんは「どうしたの？」  
と訊ねないはずがありません。好奇心で燦々とした瞳とふわふわし  
た足取りは気になって仕方がないと言うことを、体で表してくれて  
います。けれど、それを訊ねるタイミングがわからないと言った所  
でしょうか。信号で足を止める度にちらりちらりと私の顔を見てき  
ます。「紺の振袖かわいいね」と他愛のない会話もしてきます。そ  
して青に変わると何事もなかったかの様な顔をして足を踏み出すの  
です。

それを何度か繰り返し、神社の看板が見えた頃でした。織絵さん

は痺れを切らしたように口を開きました。

「あーもう。いいや、聞いちゃえっ」

私の前までぐんと足を伸ばして立ち止まり、じろりと大きな瞳で顔を覗いてきました。

「どうしたの？ 織絵さん」

「その言葉をそっくりそのまま恵那ちゃんにお返しするよ！」

彼女は口を少し膨らませ地団駄を踏みながらそう言いました。

「どうしたと言われても……」

ただ夢の事と、昨日の過ちを思っていただけです。

どうしてあの様な夢を見たのでしょうか？ 夢と言うものは人の深層心理を映すと言います。ならばあの夢は私の無意識の固まりなのでしょうか？

私はあの夢の通り、小学校低学年までは昼休み前の掃除時間まで給食をよく食べていました。あの頃はまだ人並みに食に対し好き嫌いがあつたので、涙を溜めながら食べていた覚えがあります。級友には掃除をさぼる為にわざとやっているだろうと文句を言われることも少なくありませんでした。それに掃除をしているため、砂埃が舞う中の食事は当たり前です。けれど、たまにどうしても食べられない物があつた時、級友が食べてくれることがあつて、その度に友達っていいな、と強く思いました。

そんな私は、勉強が出来るわけではなく、絵も下手で、運動も出来ず、口数も少ないので友達があまりいませんでした。ですが、給食を時間内に食べられるようになり始めた小学生の中学年くらいから、どれも平均的な能力を身につけ、中学二年生の頃には学年で上位の成績を収めるようになっていました。これはひとえに、日々の努力の賜物以外ありません。年三百四十日のピアノ、絵画、水泳、バレー、塾といった習い事のお陰なのです。何も出来ない私に何か出来るようにしてくれたことと引き換えに、私は友人と関わる機会が学校以外でほとんどありませんでした。

それでも寂しくなかったのはどうしてでしょう？ 林間学校も修

学旅行も毎日の学校生活も、ひと時もそのような気持ちに陥ったことはありませんでした。もしかして友達がいらないことになれていたからでしょうか？

いつまで経っても続きを話さない私に嫌気がさしたのか、織絵さんはぷいっと膨れっ面のまま勢い良く前を向き、先に歩いてきました。私も慌てて追って行きます。

近づく織絵さんにはたりと笑って私の方を振り返りました。

「もしかして昨日もこんなだったんじゃないの？」

「こんなん？」

「白井と出かけたんでしよう？ そのとき、あいつは先へ先へとあたしみたいに歩いたでしょう」

行きと帰り、そして途中に用を足した記憶しかない私ですが、織絵さんの言うことに違いはなく、うんうんと何度も頷きました。

「話もしないでさっさと歩いて、あたし達のペースを考えないで好き勝手やっていたんでしよう？ ねえ？」

「どうしてわかるの？」

織絵さんのまるで昨日の私達の行動を見ていたかのような言葉のせいで、雪崩のように次々と昨日の痛々しい記憶が生々しく浮かび上がります。

「わかるわよ。男なんてそんな奴ばっかよ。それでどうだった？」  
どうだった。その言葉はずしりと私の心を重くします。

「歩くのがとにかく速くて、私が少しよそ見や立ち止まるとすぐ距離が開いちゃって、埋める為に小走りするの。それでも一言もないの、気付いてないの。会話もないから何か話さなくちゃ、でも気分を悪くさせる様なことはだめだから、なんて選んでいる間に時間が過ぎていって、結局どうでもいいことを口にすると、つまらなそうな顔をするの。なのに訳のわからない所で笑って……もう本当にわからないの。何が考えているか。異星人だとか関係無しよ。もう全然……ぜんぜん」

みしりみしりと瓦礫が崩れる様な音が心からしている気がします。

けれど言葉は止まりません。

「全然楽しくないよ」

「そう」

ボソリと私が言うと織絵さんは静かに頷きました。

鳥居をくぐるとクリスマスに見た境内が映って、あの日に戻れたらと再び思ってしまった。するとおみくじ売り場の方で手を振る人達が映りました。織絵さんを見ると大きく手を振り返しています。「ちょっとごめんね、すぐ戻るから」

そう言っただけはおみくじ売り場に駆けて行きました。途端に大きな声を出し、笑い声を上げています。私の前では決して見せない姿です。織絵さんは友人が多く気さくなので、私の様な暗い性格をした者とは合っていないのかもしれない。けれど織絵さんは優しいので、こうやって一人で年初めを迎えようとしていた私を、初詣に誘ってくれました。

彼女はこれからあの方達と遊びに行ってしまうのでしょうか。そして私は一人で山を下り、電車に乗って、部屋で塾の問題集をします。これからもそうだった日々が続くのでしょうか。

話し終わっただけか、織絵さんは私の方へ走って戻ってきました。息を切らしています。

「ごめんね、待たせてしまったね」

「いいよ。気にしてない。それよりもう行っちゃう？」

「へっ？ どこに……って。なるほどね」

このこの、と言いながら織絵さんは私の頭を人差し指で突いてきます。

「なんです。や、痛い」

「へー、嬉しいねー。私は嬉しいよ、恵那ちゃん」

「えっ？」

「だって、高校に入ってから一つも相談事もしてこないし、泣かないしで、寂しかったんだよ。そんな恵那ちゃんが私に久しぶりに愚痴を言ってくれるし焼きもちも焼いてくれるし、今年はこれから嫌

なことしかないんじゃないかってくらい幸せづくし」

織絵さんは私の不幸話を聞いてどこかうれしそう……というよりは安心したといった表情を浮かべます。

「小学校の頃とは見違えるくらい成績も上がって、友達も出来てさ、もうあたしなんていらないだって思っちゃったよ」

「そ、それは私のセリフ。いっぱい友達がいる織絵さんに私なんて……」

「なにそれ」

こらえきれないといった具合に、彼女は口を抑えて小さく笑い出しました。

「私のこの性格は持って生まれたモノ。友達が多いのはその副作用なの。言い換えれば成長してないってことなのかな？ その点、恵那ちゃんは小学校の頃のドジで間抜けから石を積み上げるみたいに地道な努力で成長したの。本当に尊敬してる」

「それは私のセリフよ」

織絵さんの言葉を聞いた瞬間、映画のフィルムのように断片的に思い出が溢れてきます。

小学一年生の頃、下校を一緒にしようと誘ってくれたこと、体育で二人組を組んでくれたこと、嫌いな給食を食べてくれたこと、写生の時にモデルになってくれたこと、林間学校のと看、登山で疲れた私の手を引いて歩いてくれたこと、卒業式に皆の前で泣けない私と公園で泣いてくれたこと、中学一年の自己紹介の時言葉に詰まった際に気の利いた一言で皆を笑わせてくれたこと、顧問の先生にバレー部の部長にされ、後押しして支えてくれたこと、塾であまり文化祭の準備に参加できず、周りから避けられ始めたとき、皆を説得してくれたこと、修学旅行でグループを組めない私を入れてくれたこと、卒業式で泣くあなたをみてもらい泣きしてしまった私にハンカチを貸してくれたこと……。

「私は織絵さんがいないと本当に駄目で……学校に通ってなかったかもしれない……本当に尊敬しているの」

「そこまで言われると照れるよ」

織絵さんは境内の方に体を向けて、「行くよ」と歩き出しました。「じゃあ、これは運動も勉強も芸術も頑張った恵那ちゃんの最後の試練かもね」

「これって？」

「白井のことよ。こればかりはあたしがどうこうするモノじゃないでしょ。人の恋路に手を加えたって良いことなんてありやしなかったのよ。だからこれまでの経験で恵那ちゃんは白井の心をつかみなさい」

「できるかな？」

「できるわよ。好きなんでしょ？」

昨日は全く楽しくなくて疲れが凄く溜まりました。けれど……その気持ちが消えることはありませんでした。

「はい」

一礼をし、賽銭箱に五円を放ってじゃらじゃらと鈴を鳴らし、願うは彼のこと。

去年までは一家健康という言葉でしたが、たまにはこういう年もあつてはいいのではないかと思うのです。

私は恋に溺れる決意をしたのです。

## 第八話 白井優

世間や社会という言葉は俺は忌み嫌う。

いつからだろうと考えてみて、それがお母さんを亡くした時なのか、それとも弟がUFOをみたいと言った頃からか、物覚えがついた頃からのかははっきりとしない。だが、幼稚園の頃から友達が少ないことは事実なので、小さな頃から間違いないのかも知れない。小中と学校の行事で組を組まされても、俺は一人で行動し、よく教師にしかられたものだ。

しかし、俺はあの異星人と出会うまでそんなことを深く考えたことなどなかった。そして気付くこともなかった。世間と社会を意識するということは人間を人間たらしめる最も重要なことだと。つまり俺は人間を好きでなかったということなのかもしれない。だとすれば、それは俺が羽田を何故嫌っていたかという理由に当てはまる。羽田は凄く人間らしいように感じる。他人からの好感度を下げないように気を使い、言葉を選んで話し、大人の言う通り行動し不安を抱かせない。その態度を誰に対しても分け隔てなく行っただ。まさに人の鏡という存在かもしれない。

それを俺は気に入らないのだ。好きなようにやりたいようにすればいいのだ。他人からの評価という不明瞭なモノを生き甲斐にするのではなく、自分という明瞭なモノを信じればいい。

そんな偉そうな言葉を自分の胸に押し当てる時が俺にもある。

異星人と出会ってからも毎晩、UFOを探していた。生まれてから一度も病院から出たことのない弟の為に。学校と病院と山を歩き来し、商店街で夕食を済ます日常は新しい年を迎えても変わることはなかった。

弟も相変わらずだった。新年を迎えても「あけましておめでとう」などと言う言葉はなく、「またきたの」と無愛想な面を見せて、見舞いのUFOパンをベッドに置くと投げつける始末。ここで自分の

思いのまま殴つてやろうかと腹が立つのはいつものことだ。しかし、そうしてしまうと弟の行き場が亡くなってしまう様な気がして出来なかった。

母親は弟を産んで亡くなり、父親は転勤族でお金だけ贈ってくる、そんな家庭。けれど弟が産まれる前までは普通の家庭だった。父親は毎日夜の七時には帰宅し、母親は夕食を作り、三人で食卓を囲うのが当たり前だった。それが数年前の出来事とは思えない程、現状はかけ離れている。

俺はその頃の幸福を知っている。あの頃は鍵を持っている同級生を羨ましく思ったが、そんな憧れは数年経てば消え、嫌な思い出は消え、楽しい思い出だけが残った。けれど、弟は生まれも育ちも院内で、母親の顔も知らず、父親と会うのは一年に一回くらいなので、その幸福感を知らない。そして知らない方がいいだろうと俺は思う。玄関、リビング、廊下、洗面所、風呂場、階段。至る所にあの頃の思い出が残っていて、なんの前触れもなくフラッシュバックされ気色の悪い不幸せさに包まれる。

そうならないだけ、弟は幸せなのかもしれないと思うのだ。

だが、俺よりも弟が幸せかもしれない、という妄想は碎かれた。それは三学期の始業式の前日だった。放課後ではなく、たまには昼に顔を見せようかと病室を覗いた時だった。背筋に電撃が走った。それは肩こりを解消する様なものではなく、心臓を動かすくらいの電力だった。

弟が外の景色を見ながら泣いていたのだ。見つめる先には同じ年くらいの子供と、母親が手をつなぎながら歩いていた。

「僕も外に出たい。学校にいきたい」

消え入りそうなくらい小さな声だったが、俺はしっかりと聞き取った。全神経を鼓膜に集中させて。そして俺は病室に入ることなく、そのまま学校の旧図書室に足を向けたのだった。

扉を開けると、ソファーに寝そべりながらスナック菓子を食べる異星人の姿があった。年が明けても彼女は変わらずここを訪れた。

俺を見るなり異星人は不機嫌そうな面を浮かべ、チラリと睨む。

羽田もこの異星人のように思うまま話し、感じ、振る舞えばいい。例えそれが人間的でないにしてもだ。我慢している人を見ていると疲れてしまう。そんな言葉を自分に言い聞かせる。

「どこに行っていたのですか師匠。待ちくたびれま」

彼女の言葉を遮るように俺は手を取り、しつかりと瞳を見つめた。

「どうしたのですか師匠？ いつもとは違う様子ですが」

「頼む、UFOを見せてくれ！」

骨の芯まで冷やすくらい寒い始業式の通学路。コンクリートは一面、雪で塗り固められ、足の指先はコロリと取れるのではないかと思っくらしいに感覚がない。

携帯電話で時間を見ると始業式が終わったくらいの時間帯だった。そろそろ教室に着かないと遅刻ではなく欠席扱いにされてしまうので足を速める。

その間、昨日の旧図書室のことを思い出していた。

「UFOを見せるだなんて、師匠、その意味をわかってますか？」

それがいかに重大なことかは地球人の俺にはわからない。だが、彼女の戸惑った声を聞き、それに合わせ神妙な顔つきにしてみた。

「そのようなことを私に頼むなんて馬鹿げています。とりあえず理由を聞きましょうか」

「こいつの弟がUFOを見たいと言っんだ。見れば元気になって病気も良くなるかと思っただが」

「そ、そんな理由で師匠は私に死ねと言っているのですか」

「いや、そういう意味じゃ……」

「それと同意です！」

彼女は俺を軽蔑した目で睨みつけ、狭い旧図書室の中を駆けて出て行ったのだった。

異星人があれだけ拒絶反応を起こすくらい、UFOを呼び出すこ

とは危険なのだろう。そういえば彼女はこの星に来るだけでも大変に危険だったと言っていた。もしかするとそれが関係しているのかもしれない、し、していないのかもわからない。

教室に入ると人はまばらだった。体育館で行われた始業式が終わってまだ間もないのだろう。担任の姿もなく、一人の生徒の机に数人の生徒が群がり、何やら笑みを浮かべ、楽しそうにしている。まあ、いつもの光景だ。

しかし、席に着き何気なく辺りを見渡すと、ちらちらとこちらを伺う視線を感じた。こんなことは異星人と告白した頃以来なので、居心地が少し悪い。

それに俺の名前も聞こえてきた。

こそこそと話し、嘲笑うような表情でこちらを見られては我慢がならず、席を立ち、一番大きな輪を作っている机に向かった。そこは寺内の席だった。俺が近づくと、周りを囲んでいたクラスメイトが寺内の正面を開けてくれた。しかし、その行為に好意を感じ取れない。くすくすとした嘲笑が洩れているからだ。

「朝から騒々しいな」

「そうだな、異星人」

寺内が真面目な顔でそういうと何故か俺の隣にいた男子が笑い声を上げた。それにつられて波紋の様に教室中に笑い声が広がる。

どうしたと言うのだろうか。俺が異星人だと言うことは皆も承知で、それでいて、そうでないことも知っているはずだ。

「知っているか？ クリスマスにUFOが出たこと」

寺内は他の連中とは違い、笑わずに訊ねてきた。

もちろんそのことを知らないはずがない。一生忘れることがないだろう。

「ああ、俺も見た」

「それは良かった。お前から見てどう思った」

そう言われても、思い浮かぶ言葉は一つしかない。

「とにかく驚いた。違う星人のものだが、あんな堂々と姿を見せる

と思わなかったからな」

キヤラ設定の為にはこういう馬鹿げた言葉も必要だ。

「くっくくく」

こらえきれないといった感じで寺内は笑い始め、周りの連中は大笑いに変わっていた。

いつもならそれほどウケることではない。この温度差はどういうことだろうか。

すると輪の中にいた男子が腹を抱えながら俺に向かって指を指し、「馬鹿だ」という言葉を漏らした。

「何が他の星人だよ。あれは俺と寺内が作ったんだよ。マジで可笑しい」

「そんなはずはない」

馬鹿げたことを言う奴だ。あれを機に羽田に異星人が乗り移ったのだ。UFOを他の発行物体と見間違えた可能性なら否定することが出来ない。しかしUFOのせいでおかしくなった彼女という証拠がある。

「本当に見た。仮にお前達作ったものがUFOだとしても、それは俺が見た物と違う可能性だってある」

「いつの何時何分だ？」

「クリスマス……夜十時半ば辺りだった気が……」

再び笑い声上がる。

「場所は？」

「そうはちぼんの伝説がある尾錠山の辺りで複数見た」

「なら、それは俺たちが作ったんだよ、なあ寺内」

「ああ、間違いない」

寺内が頷くと同時に、周りの連中が次々に声をあげた。

「そんなに言うなら自分のUFO呼べよ」

「そうだ、宇宙人だろ？」

「ちがうって。い、せ、い、じ、ん、だろ」

見下す視線と馬鹿にした言い草に苛立を覚え、とりあえず旧図書

室に退避しようかと思った瞬間だった。背後から怒声が聞こえた。

「馬鹿！」

するとそいつは顔を真っ赤にして俺の前まで駆けてきて、もう一度小さく「馬鹿」と言った。

「何も知らないのに、どうして馬鹿にするの？ 本当に見たかもしれないじゃない！ どんな思いでUFOを探しているか知らないくせに馬鹿にしないでよ！」

そいつ……顔を真っ赤にし鼻水をすすりながら声を荒げる羽田……いや、あいつは直情的になって人を怒鳴りつけたりはしない。それに弟の件も話していない。よって異星人だろう。

その異星人はいよいよ涙を流しそうな表情になったので、俺は思わず手を取り教室を飛び出した。これ以上何か話させると感情に任せて余計なことを言いそうだからだ。

階段を下り、一階のホールまで行き、逃げられないように彼女を壁に向けた。

「異星人の状態でクラスメイトと接するな。バレたらどうする」

彼女はその言葉に反応することはなく、魚のような目で見つめていた。聞こえないフリでもしているのだろうか？

「聞いているのか？」

すると彼女はゆっくりと両手を頭に持ってきて、髪をゆっくりとかきむしった。細い指の隙間にきめ細かな髪が通り、さらさらと揺れる。

眼が合った彼女は口を動かしていたが、声には出しておらず何を言っているのかさっぱりだった。だが、つらりと滴る涙を見て、ゾツとした。

「おまえ、もしかして……羽田か？」

## 第九章 羽田恵那

痣が出来るのではないかと心配なくらい強く繋がれた右手に、凛々しく光りの灯った瞳。表情にはさらりと滲む優しさ。それらは私の前では決して見せることのない白井くんの姿でした。

白井くんからの「羽田か？」という問い掛けに、私は鉛の様に重い頭を上下させてなんとか頷いてみせました。

すると彼の手の力がすうっと抜け、私の手は行き場をなくしづらりと揺れました。

「どうして羽田が弟のことを？」

そのようなことを訊ねられても私にはわかりません。

「何故か思い出したのです」

「何故かって……わかりきったことだろ！」

白井くんは声を荒げ、私の方に足を蹴り上げました。驚いた私は咄嗟に体を屈めますが、足は私ではなく横の壁に当たり、ドンという音がホールに響きます。

「異星人だつて言った俺を馬鹿にするためのドッキリかなんかだろ！」

「違う」

「何が違う？ どう違うのか言ってみろ」

白井くんは恐らく私が多重人格のフリをしていたと言って怒っているのでしょう。けれど、私はそのようなことをしたつもりもないし、する必要もありません。可能性として、私の多重人格が白井くんを騙した可能性はあります。

しかし、どうして異星人と偽ったのでしょうか。私は私かわからず、何がどうなっているのか理解できません。己のことなのに全く情けないことです。

自分の頭の中が暗闇に包まれ、どの記憶が正しくて、信用に足るものなのか自信を持ってません。

「私だつてわからない……怖い」

呟いた瞬間でした。二階の方の廊下から「コラー白井！」という声响起、ドタドタドタと慌ただしい足音が近づき、「恵那に何してんの！」と言って、息を切らしながら織絵さんが現れました。

白井くんは対処に困っているのでしょうか。目の前にいる織絵さんに気をとられています。その際に私は白井くんを手で押しつけ、その場から逃げ出しました。このまま白井くんといても、何を問われても答えらない私だと、恨み、憎まれることは必至で、それは恋を決意した私にとって心臓を握りつぶされるくらいの痛みなのです。

## 第九章 白井優

羽田の友人の織絵という奴にやたらと怒られたが、話の最中にトイレに行くことで彼女から逃げ出す事に成功し、終礼を受けることなく下校した。

それから俺は羽田とのことに悩み、誰に相談していいかわからず、消去法として遺憾ながら商店街のボロい写真屋を訪れていた。

胡散臭い小生意気で小学生な容姿をした現像屋に向かって俺は口を開いた。

神社でUFOを探していると羽田という同級生が倒れていて、介抱しようとしているとUFOを発見し、その後羽田は自分のことを異星人と言うようになった。異星人の彼女は羽田とまるで性格が違い、自由気ままで感情を隠さない。そして都合上、一時間しか体を乗っ取ることが出来ず、その間の記憶を羽田は持っていない……はずだったのだが、今日の件で羽田と異星人に記憶の齟齬はないことがわかった。つまり、それは羽田が嘘をついていたことに繋がり、クラスメイトの偽造UFOの件と組んでいたのではないか、と言うことをかいつまんで話したのだが。

「ほうほう。ドメスティックバイオレンスの危険性ありと。それにサドの傾向強し。こりゃ将来付き合う相手は相当苦勞しそうやで」  
明菜さんはニヤリと笑う。罪の意識でついつい余計なことを口走ってしまった。

「まあお前みたいなアホウを好く奴なんか早々おらんやろうけど」  
「うるさい」

「へー、相談されてやってるのに、ようそんな口を聞けるな」  
「帰ります」

淹れてもらった紅茶を一口しか飲んでいないが、このまま彼女の言葉を耳に入れると胸に毒素が充満しそうなので、席を立ち、背を向けた。すると嫌味ったらしい声が背中に響く。

「帰ってもええけど、この話は尾びれも背びれも足ひれもついて町中に流れることになるやろうなあ」

町中から変人扱いはされているが変態扱いはされたくないのので、俺は苦虫を噛み潰しながらも座り直した。

「で、なんやねん。騙されたから仕返しするとかせえへんとか、そいう話？」

「違います。そんなことはどうだっていい。ただ本当に騙されているのか気になっただけです」

真面目な羽田がそのようなことをするのかという疑問はあるが、そもそも俺は羽田のことをほとんど知らないの、彼女の人柄を判断基準にはできない。そうすると、彼女が本当に異星人なのかという決め手になるのは、演技であったかそうでないかだ。

しかし、俺の眼から見て、羽田が演技をしていたとは一切思えない。あれほどの演技力を日常生活だけで身につけたとなると、どのような家庭環境で育ったかを考えて身震いがする。それほど隙のない異星人ぶりだった。だとすれば、何故異星人の記憶が羽田にあったのだろうか。

「これ、お前と他の客の撮った写真やけど、おもしろやからパクってたねん」

明菜さんはそう言うとオーバーオールポケットからおもむろに一枚の写真を取り出した。そこには山道に落ちた大量のフリスビーが映っていた。

「これはどこの写真？」

「多分、尾錠山の近辺。ちょうどお前がUFOの写真を撮った辺りやわ。悪戯UFOの正体は発光塗料を塗ったフリスビーで間違いないやろ。隣町の商店街でそういうイベントをクリスマスにやるってことも聞いてたし」

あの日に見た大群のUFOは山から投げたフリスビーだったのか。「ほんでもう一枚、これはお前が撮った写真」

山から見たこの町の夜景がブレて映っている。写真の右中央には

小さな丸い塊がいくつかが映っているので、それが俺の撮ろうとしていた寺内の作った偽UFOに違いない。……のだが、どうもおかしい。左上に空に点々とある星々の少し下、雲の切れ目辺りに橙の光の玉が写っていたのだ。偽造UFOの五倍ほどの大きさがある。

「すぐさま俺は明菜さんに目をやる。」

「もしかして」

「期待たつぷりの顔しよつて。そやな、今まで何万枚と現像したけど、空にこんなオレンジなまんまるは見たことないな」

そうになると、羽田は本当に異星人に乗っ取られていると言つことになる。

「ほんで、お前が言う記憶の齟齬？ やっけ。ありえるんちゃうの。その異星人は羽田の記憶で物事を判断したり話したりしてるんやろ。脳という記憶媒体は共通なんやから、そういうことも起きるかもせんやろ。言わば記憶の入れ違い」

「そうになると、異星人はいる」

胸が高鳴り、顔に熱が帯びる。手は震え、目が潤む。

なんなのだろう、この感情は。

座つてなどいられず、俺は店を出て駆け出した。

早く異星人に会いたいという気持ちが全ての原動力となつてしまつていた。

## 第十章 羽田恵那

白井くんから逃げ出した私は、学校を出ましたが行く当てもなく、けれど教室に戻るのには億劫なので、そのまま塾に向かいました。今日は冬期講習後のテストがあるので、早めに着いて勉強することは悪くありません。

講師に参考書を借り、机に向かいページをめくりますが幾ら読み込んでも文が頭に入らず、ろくに集中できないままテストを迎え、そのままテストを終えてしまったのでした。

そうして帰り道。テストの出来を母に聞かれるのが嫌で帰宅できず、夕暮れの川沿を当てもなくふらふらと歩くのでした。

歩き疲れた私は、夕焼けが反射する川の水面を見つめることにしました。けれどぼうつとは出来ませんでした。

思い浮かぶのはもう一人の自分のこと。白井くんの言葉からするに、もう一人の私は異星人という肩書きを持っているようです。白井くんと同様に。ですが、どうしてもそのような事を……そのようなことは、浅く考えるだけでわかります。

白井くんに近づく為でしょう。

そして、白井くんは私が異星人のフリをして騙したと怒っているわけです。

いつも馬鹿にされても怒らない白井くんがなぜ怒ったのか、という理由も見当がついています。きっと、彼はもう一人の、異星人の私に好意を抱いているのでしょう。だからすぐに私の手を離れたのです。

こうなってしまうえば、私という存在が不必要な気がしてなりません。

「どうしたんや、嬢ちゃん」

背後からその言葉をかけられ、私はゆっくりと振り返りました。言葉だけだと、柄の悪い男性のようですが、舌足らずな可愛らしい

関西弁だったので、恐怖心はまるでありませんでした。

「いえ、お気になさらずに……、あつ」

一度見れば、忘れることが出来ないくらいの小さくて愛らしい姿をした方が立っていたのです。確か姉さんが中学生の頃の先輩だった方ですが、名を思い出せません。年齢からするともう二十歳を越えているはずですが、姿形が当時のまま変わりありません。

「覚えてるんや。ありがとう、確か美那の妹やんな。久しぶり」

彼女は私の隣にちよこんとあぐらをかき、飲みかけの紙パックの豆乳を差し出しました。

「悪いです。飲んでいる途中なのに」

「水分補給せなあかんで」

その言葉で自分の頬に涙が伝っていることに気がつきました。冬だからと言って失った水分を補充しないわけにはいきません。ありがたく喉を潤わせて頂きます。

「確か自分の家って、厳しかったでな。理由もなくこんな時間にふらふらしていけんの？」

大丈夫なはずがありません。まず間違いなく夕食は抜きになるでしょう。

「何か悩み事？ 聞くで。うちは今、機嫌ええからな」

「……ですが」

「親しい人やと相談しにくいこともあるやろ。だから遠い繋がりの人間に話すのもアリと思うけどな。うちの飲み物を飲んだ分くらい話してや」

そうまで言われれば甘えてしまいたくなるのが今の心境。私は思いの丈を彼女にぶつけることにしました。

「嘘のように思つかもしれませんが、実は私、多重人格者なのです。ですが、そのことを軽視していて、大切な人を混乱させてしまいました」

「どう混乱させたん？」

「もう一人の私にしか話していないことを、私が知っていたからで

す

「それは中々におもしろいことやな」

「甘く見ていました。好きな男性と勝手に仲良くなれ、知らない間にもう一人の自分が彼と会っているからか、冬休み中に会えなくて寂しいなんて思う事がありませんでした。けれどこれだけ迷惑をかけているとすれば、これからを考えなくてはなりません」

腕を組み、神妙な面持ちの彼女はうーんと唸りました。その隙にと、溜まっていることを再び吐き出します。

「姉さんと知り合いましたら知っているとありますが、私は小さな頃から習い事ばかりをさせられてきました。なので自分から何か始めることはなく、全て母さんの言われた通り育ってきたのです。そこに私という人格は必要なのでしょうか。ただ、毎日勉強するだけならロボットでも可能です。友人は尊敬してくれて、今の私が好きだと言ってくれて楽になりましたが……私は彼に好かれています。もちろん友人のことも大事ですが」

「どっちか殺して助かるんやったら彼をとるん？」

「こんなことを織絵さんに知られると悲しむでしょうけれど、今は彼が第一なので、私は頷きました。

「しかし、彼は私でない私を好きだと言います……。でしたら恵那という名前はその方にあげて、私はもういなくなってしまう方がいいのではないかと思うのです」

胸を淀ませていた思いを言い終え、喉が渴いたので右手に持っていた豆乳を一気に飲み干します。

「あつ、こら。全部あげるっていうてへんやろ」

慌てて豆乳を奪い取った彼女ですが、空のパックだと気付いてクシヤリと握りつぶします。その姿が見た目と同様に子供らしくて少し微笑ましい気持ちになります。

「でも、一口だとも聞いていませんよ。ごちそうさまです」

「それもそうか」と彼女は私の言葉を鼻で笑いました。

「うちは思うんやけど、そんなに嘘ってアカンかな？」

「嘘つきは泥棒の始まりと言いますよ」

「月並みな言葉をありがとう。でもな、そりや意味もなく嘘つくのはアホやで。でも相手が喜ぶ嘘やったらええんと違う？」

「でも、やはり気が進みません」

「嘘つくしかなかつても？」

「それだと仕方がない……ように思いますが」

彼女は立ち上がり、お尻を叩いて雑草を払いました。

「嘘は嘘やからつくときはそれなりの覚悟が必要や。最悪嘘をつく為に得ようとしたもんを失うことになるっちゅうな」

そう言つと彼女は背を向け道路の方に歩いていきます。最後に感謝の言葉を口にしよつとした瞬間でした。彼女の声が被さります。

「それと、簡単に名前は捨てたアカンで」

傾斜を上りながらポケットに手を入れ、タバコを取り出したのかと思つと、棒付きキャンデーで、それを口に入れ右手だけで別れを告げて、去つていきました。

白井くんについて有益で、なおかつ彼に好かれ、失敗すればさよならをしなければならぬ程の大嘘とは一体何でしょうか。……それを導ければ、仲直りできる可能性は大いにあるように思えます。

先ほどまではブラックホールのように陽の気を吸い込んでいた私の心ですが、彼女と話したお陰で自然と前向きになつて驚きます。

……そういえばあの方の名前は何だつたでしょうか？

## 第十章 白井優

会いたいという勢いに任せて写真屋を飛び出した俺は、商店街を何回も往復し、知らない脇道を通り、いつも利用するスーパーに利用しないスーパー、そしてコンビニ、尾錠山に、宇宙博物館とその周辺の公園。町中の至る所をかけずり回ったが、彼女を見つけることは出来なかった。そして思い知る。いかに俺は彼女のことを知らなかったのかを。

別に羽田のことはどうでもよかった。だが、もしかすると異星人状態の彼女が俺のことを待っているかもしれない。そう思うと息が苦しくなり、溺れた様な感覚に陥る。

その苦しさを紛らわすため、夜は尾錠山で空を眺めながらUFOと彼女を待ちわびたのだが、一晚経っても両方現れなかった。当たり前前の話したが。

朝になり、いったん家に帰ろうかとも考えたが、それは時間の無駄な気がして、その足で学校の旧図書室に向かった。

旧図書室に入りストープの電源を入れ、ソファアに腰掛けると、緊張が解けたのか急激に眠気が襲い、頭がヘルメットを被ったように重たくなり、我慢できずそのまま寝息を立ててしまった。

どれくらい時間が経ったのかはわからないが、頬にかゆみを感じ、眼を開くと頭上に異星人の顔があった。

「おはよう、師匠」

「おはよう」

異星人は口の周りにはスナック菓子の粉が付いていて、片手に持った袋から取り出し、むしゃりと食べ散らかす。どうやら頬のかゆみの原因はスナック菓子の粉のようだ。さっと頬を払うと、やはり黄金色の粉がついていた。

「人の頭の上で食べると菓子の粉がつくだろう」

「…お菓子の粉じゃなくて、これは魔法の粉」

どうやら甘くて塩辛いあの粉は異星人すら魅了したようだ。

「コーンフレークとどっちがいい？」

「…コーンフレーク…って言うとお食べたくなってきた」

どれだけ童心なのだ、この異星人は。

「ところで、昨日はすまない。大変なミスを犯してしまった」

「…アレについては仕方のないことです。私も驚きました。まさか私の記憶が羽田恵那と同期するなんて。けれどそれは良く考えれば予想できたことですね」

「どういうことだ？」

「…だって、師匠はほとんど白井優という人間と変わらない性格を持っていきますよね。私は以前まで師匠が白井優に合わせていると思っていました。それは違い、白井優の記憶に師匠の記憶が混ざり合ったので、師匠に似てきたのではないかと思うのです」

「その考えは一理ある」

と、もともとそんな言い方をしたが、俺は俺で異星人ではない。だが、羽田の件を考えれば合っているだろう。異星人の記憶が地球人の記憶を上書きする…そう考えた瞬間、背中に鳥肌が伝う。

「どうしました師匠。死にそんな顔してますよ」

「死にそうとかいう例えを簡単に使うな。いや、でも恐ろしいことを考えてしまつてな」

「…なんです？」

「ああ。俺たちって向こうの星からすると身分は低いだろう？」

「…ええ、生コーン、ポップコーン、コーンフレーク、スナック菓子でいうと、スナック菓子くらいのランクです」

わかりにくい例えをする。恐らく生コーンから好きな順で、スナック菓子が一番嫌いなのだろう。

「…ということは、生コーンの言うことは絶対と言つことだろ」

「…はい、逆らつと終わりです」

「考えてみる。一番身分の下の方に、生きるか死ぬかの長旅をさせ、そしてその星の知的生命体に寄生する。そして時が経てば、その知

的生命体は記憶を混ぜられ、俺たちに近づく考えをもってしまう……  
…というものは？」

そこから先は自分の口から言いたくなかった。この星に住む人類  
として。

「……………侵略ってことですか？」

俺はゆっくりと頷いた。

彼女ら異星人がこの星に来たのは人類の観察なんかではなく、も  
っと禍々しいものだった。

「私……そんなつもり全くないですよ。ただ、楽しく過ごして、地  
球の良い所を知ろうとしただけなのに」

彼女は言葉に詰まりながらも懺悔を口にし、何かに気付いたのか、  
顔を上げて俺の眼を見た。

「では、恵那はどうなっちゃうんですか？ 白井優はどうなっちゃ  
うんですか？」

「さっき言った通りだ」

「…そんな。……私達って本当に必要な存在なのでしょうか」  
俺にとっては必要な存在なのだが。

その言葉がよぎった瞬間だった。体の力が抜けずるりとソファー  
からすべるように落ちてしまった。

「どうしました師匠？ もしかして真実に気付いたので彼らが隠滅  
しようとして！」

「ちがうちがう」

一瞬、異星人と同じことが考えたが、脳がふやけたようになって  
ぼうつとし、体全体がスチームで包まれたような感覚、これは間違  
いない。

「風邪だよ」

冬の日本海側の町にある山で大した防寒もしないで一晩越せば、  
こうなることは当たり前だ。

「気にするな。少し良くなるまでここで寝ておくから……ところで  
お前は何しにきた？」

「…ご飯を食べにきたのですよ」

「朝ご飯くらい家で食べよ」

「…何をボケたことを？ お昼ですよ師匠」

携帯電話を取り出し、時間を確認すると確かに十二時四〇と表示されていてまさにランチタイムだった。この部屋で五時間以上寝たと言うのに全くそんな気はしない。それくらい体はだるい。風邪のせいだ。

異星人はそんな俺の横で弁当を広げ、不味そうな顔で食べ始めた。やはりこの星の一般的な食べ物には口合わないのだろう。卵焼きも白ご飯も鮭もウインナーも全て腐っているかのような表情だ。

「そつだ。俺の風邪が治ってからお前が好きなものでも食べにいうか、そしてこれからのことを考えよう」

「…はい、頑張つて早く治して下さい師匠。楽しみにしています」  
異星人は一体何が好物なのだろう？ その答えが夢に出ればいいなど思いつつ目を閉じた。

風邪は次の日にでも治るかと思つたのだが、意外と長引き、あの日から三日が経つても家から出られずにいた。

内側から頭蓋骨を鈍器で殴られるような頭痛、水分のほとんどを奪っているのではないかと思つくらいに止まらない鼻水、イガイガを通り越し感覚がなくなつた喉、じわじわと痛みが滲むような関節の痛み、暑苦しい体温。それらは悪化の一途を辿つた。

食事を摂り体力を付けようとしても、そもそも摂る体力すらないので布団の中で天井を見つめるばかりだ。眠気などとうに失せている。

そんな夕方に携帯電話が鳴つた。

一度は無視をしたが、何度も何度も電話が鳴るので、仕方なくその不届きものの名前を確認すると、思わぬ名前が表示されていた。いや、名前ではなくそれは『公衆電話』だ。そこからかけてくる人

物は俺の知る中で一人しかいない。

「どうした、弟」

誰に携帯番号を知ったのだろう。それよりもどうして俺に電話を？　今まで一度もなかったのにどうい風吹き回した。

「すげーな、お前」

弟は今までにないくらい興奮した様子だった。はあはあと息が漏れている。

「落ち着け、俺の何が凄い」

「異星人だよ。宇宙人が僕の病室に来たんだ」

「そんなアホな」

「ほんとだつて。形は女の人だったけど、雰囲気違ったね」

「うそだ」

「ほんとだつて。いきなり病室に入ってきて、名前も言わないで、私は白井優の友人の異星人です。あなたの兄に、弟にUFOを見せると約束しましたので伝えにきました。時間は九時くらいですので、尾錠山を見ることを忘れないように、って言ったんだ。凄いだろ、セリフ全部覚えちゃったよ」

「うそだ」

「ほんとだつて」

「嘘だと言ってくれ」

それが本当だとすると、彼女は……。

「嘘じゃねーよ馬鹿。テメーで約束したんだろ、異星人と」

していない。あれは一時の気の迷いであつて、しかもUFOを見せることが、死に近い意味を持つなどと思っていなかったからだ。これは彼女の勝手な判断だ。

興奮した弟はまだ話したそうだったが、そんな時間の猶予などなく電話をすぐに切り、布団を出したが、体はいつもより何倍も重い。まるで布団を巻き付けら、その上に人をおぶったようだが、それでも尾錠山に向かった。

何百回と行き来した自宅から尾錠山までの道のりだが、体調不良

のせいか道は歪み、建物は霞んで見え、まるで荒廃した町を歩いているかの様な感覚に陥り、精神的に辛い。心拍数の上昇が風邪のせいなのか、はたまた不安のせいなのかわからないくらいだ。

俺の体温とは逆に空は曇り、雪と風が吹き付ける。この体と天気では自転車に乗れないので、のろのろと亀が歩くような速度で道を歩く。誰かがこのゾンビ状態を見かねてヒッチハイクをしてくれなにかという甘い期待を抱いたが、こんな田舎では車の通りがほとんどなく助けはない。この際UFOでもいい、キャトられてもいい、そう自暴自棄になるほどそれはそれは疲れを生んだ。

いつもなら自転車で二十分の道のりだが、三時間半くらいかかって、やっと尾錠山に辿り着いた。一服でスポーツドリンクを飲みたい気分だが、弟の言っていたUFOが見られる時間まであと二十分もない。山のどこかにいる彼女をその時間内で探さなければならないととなると休憩している暇などない。

体を動かしているお陰で汗が出て、少し体調も良くなってきたので、山道を駆け足で登った。四方八方に視線を動かし、人の気配を探す。

しばらく登り山の中腹に例の神社が見えてきた。この山で唯一、彼女を連想させる場所なので本堂まで行って彼女を捜す。

「おーい。おーい、異星人。いるなら返事をしろ」

息切れを整え、腹から声を出す、返事はなく俺の声は木々に吸われていく。

立ち止まって考える暇などない。ここではないのなら別の場所を探すしかないのです、とりあえず山を更に登ることにした。

徐々に時計を見る回数が増えていく。九時まであと五分、三分。どうして弟はもっと早く電話をかけてくれなかったのか、という理不尽な怒りを覚える程、混乱してしまう。そんな俺の眼の端に光の玉が通り過ぎた。

もしかして異星人の仕業かとすぐさま視線を向けると、そこには意外な人物が木々の隙間に立っていた。そして彼の周りにはたくさ

んの光るフリスビーが落ちていた。

「寺内。こんな所で何をしている」

問い掛けるも彼の耳には届いていないようだ。手を横に振りフリスビーを投げるが、今日は風が強く、雪も降っているせいかわらぶらと横に流れ木々の切れ間に消えていく。落ちたフリスビーの光が彼の必死の形相を映し出す。

俺はもう一度、彼の名を呼んだ。

「寺内！ こんな所で何してる」

やっと気付いたのか俺の方を見る。途端に怒りを含んだ表情に変わった。どうしてか見当がまるでつかない。

「うっせえ。羽田さんをどこに連れていきやがった！」

「羽田？ ここに来ているのか！」

「さつき山を下りていったよ、くっそ！」

会話の合間にも彼はひたすらにフリスビーを投げ続けていた。しかしどれも飛距離は伸びず、すぐに姿を消していく。

そんなことよりも異星人だ。寺内は先程山を下りたと言っていた。もしかすると彼女は違う道を通り、行き違いになった可能性が高い。そして山を下りて行く場所と言えば、やはり神社しかない。

坂を勢いよく下り、足がもつれそうになりながらも全力で走った。途中に躓き何回か転がり膝を擦りむくが、それでも痛がる時間の猶予などないので、ひたすらに神社を目指した。

異星人が寺内に頼んで疑似UFOを飛ばさせたという可能性はかなり高いが、それでも心地悪い胸騒ぎはおさまらない。

いつのまにか体の重さを忘れ、勢い良く鳥居をくぐりそのまま境内を抜け、本堂の裏に着くとそこには彼女の姿があった。ポケットに入っていた宇宙人探査機のキーホルダーで異星人かどうか確かめると、ライトは赤く灯った。

やっと出会えた。時間に間に合ったという安堵で息をつく。

彼女は手を空に向かって広げて何やら呟いていた。もしかするともうUFOを呼ぶ準備に入っているのかもしれない。

「何をしている！」

彼女は手を挙げたままこちらをゆっくりと振り返った。

「師匠。こんばんは」

悠長に挨拶をしている場合ではないので彼女の元に駆け寄る。すると彼女は大きな声をあげた。

「これ以上近寄らないで！」

今までにない語気と迫力に押され、思わずその場で立ち止まってしまった。

「今までありがとうございます」

「もしかしてお前が帰るつもりなのか」

「…ええ、それしかありません」

「それだと羽田の体から出ていくってことか」

よく目を凝らし彼女をみると暗くて表情まで見えないが、小刻みに体が震えているように見えた。

「…そうですね。けれど、こうすることで恵那を苦しめずにすみませす」

もう我慢ができなかった。彼女の切なげな声で胸がズタボロに張り裂けてしまっていた。

「行かないでくれ、俺は羽田ではなくお前と一緒にいたい」

「…馬鹿」

彼女は俺の顔から視線を外し、空を見上げた。

「私はいつまでも恵那の記憶の欠片として生き続けます。だから師匠。悲しい顔をしないで下さい。では、さようなら」

その瞬間に彼女の周りを光が包んだ。

それはまるで夢のような出来事だった。

彼女ごと月になったかのように瞬き、そしてその光の球体はゆっくりと舞い上がり、十メートルくらいの高さまで上がると上空へ消えていったのだった。

## 第十一章 羽田恵那

時は白井くと喧嘩をした日まで遡ります。

小学生のような容姿をした姉さんの友人は、白井くんが一番喜ぶことをしてあげれば良いと助言をしてくれました。確かに私には彼からの好感度が圧倒的に不足しているでしょう。

しかし、その方法とは一体何でしょうか。私は思案しながら帰路につきました。

玄関を開けると真つ先に飛んできたのは母さんの怒声でした。学校を早退したことは知られていませんでしたが、塾帰りに寄り道してきたことは帰宅時間で気付かれるので仕方ないことだと諦め、私は歯を食いしばり、母の平手打ちを受け入れました。左頬に重い二発を浴び、口内は出血してしまいました。ついでに言いますと夕御飯は罰として抜きです。機嫌が悪ければさらに髪の毛を引っ張られ引きずり回される所でした。

姉さんの部屋の前を通った際に、あの友人の名前が気になり、今年になってから一度も朝の目覚ましをしてくれず、部屋にひきこもり、一度も会話もしていない姉に言葉をかけることにしました。

きっと大晦日の宇宙科学館のことを気にして籠り続けているのかも知れません。

「姉さん。ただいま」

……………反応がありません。けれど姉さんが好きなアニメの時間なので起きているはず。これはいわゆるシカトという奴でしょう。パソコンの画面に食い入る様が安易に思い浮かぶので、また明日にでも彼女の名前を聞くことにして、自室で白井くんの幸福について考えることにしましょう。

次の日。考えがまとまった私はそれを実行に移す為、放課後に寺

内くと会っていました。場所は旧図書室。今日は白井くんが風邪の為に早退したので、部屋には二人きりです。チケットを貰った日、白井くんが座っていたソファに腰掛ける寺内くんは何故か違和感を覚えます。

「最近、よく優とここで会っているだろう」

「ええ……まあ」

白井くんとは始業式ぶり、しかもここで会ったのはクリスマス以来なので、それは私ではなくもう一人の私の仕事に違いありません。けれどここで私ではない、という話がややこしくなるので頷きます。胸をもちやませながらも。

「ところで話して何。羽田さんから声をかけてくるなんて珍しいよね」

「ええ、お願いごとがありました」

「白井の写真が欲しいのかい、それとも住所？ 噂？ なんでも売るよ」

そう言うと寺内くんは制服のポケットから何かを取り出そうとします。

「ちっ、違う。そうではありません」

寺内くんはふつと軽く笑い、再び視線を私に向けます。

「ではなにかい？」

「またUFOを作って欲しいのです」

「どうして？」

「白井くんと白井くんの弟の為に」

そう答えると寺内くんは途端につまらなそうな顔をしてため息をつきました。

「優の為に……」

「はい、材料費くらいなら手持ちにありますが、それ以外はまたお小遣いを貰ってから払いますので、お願いします」

「嫌だね」

「えっ」

白井さんと仲の良い寺内くんなら快く引き受けてくれるだろうと思っていました。大誤算です。どうして嫌なのでしょう。

「暇がないからですか？ それともお金？」

「違う。もっと簡単なことだよ。君は気付かないだろうが」

決めつけられるのはどこか気分が良くありませんけれど、それ以外に理由を思い浮かべられません。すると寺内くんは立ち上がり、私と目と鼻の位置まで近づいてきました。恥ずかしくて目を背けてしまいます。

「その顔いい」

「恥ずかしいです」

「これからもっと恥ずかしいことをしてもらおうと思っ」

「何ですか」

寺内くんの表情は薄ら笑いから真剣な顔つきに変わりました。

「接吻をしようじゃないか」

あまりに唐突で脈絡のない言葉が通り、返事が出来ず思わず固まっています。

「そうしてくれば、材料費も手間賃もいらぬ。そのかわり断れば手を貸さぬい」

「ですが……」

何を迷っているのでしょう。

私一人の手で、自称異星人である白井くんを騙す物がUFOを作れるわけがありません。どのような道具を用い、どのように作り、どのように操縦するかも全く見当が付きません。

ですが、その対価に口付けとはいかがなものでしょうか？

寺内くんを嫌いというわけではありませんが、この国で口付けという位置づけは、本来好き合う者同士が行う、愛の確認といえる行為ではないだと認識しています。その初めてを白井くんではなく、その友人に行うと言うのは気が引けますし、人の道を外れているようにも思えます。

けれど、姉の友人の方は言っていました。嘘には覚悟が必要だと。

それはまさに今ではないでしょうか。それに口付けが初めてかどうかなんて見てわかるはずがありません。ならばためらう理由がないのです。

もしも白井くんと口付けをする日が来ても、このことを伝えずに何気ない顔で唇を合わせればいいのです。

私の罪悪感で白井くんが幸せになれるのならば、それは十二分の価値があります。

「いいですよ」

私は決心し眼を閉じます。すると、顎に指を添えられ、少し上に向くようにと軽く押され、私はそれに従い俯き加減になります。

すると、まぶたの裏には白井くんの顔ばかりが浮かんできました。しかしあまり笑った顔はなく、しかめ面ばかり。

あと何秒後に私の唇は寺内くんの唇とふれあってしまったのでしょうか。そして対価として偽物のUFOが手に入ります。そうすれば白井くんの笑う顔も見られるかもしれません。目を閉じれば白井くんの笑顔が浮かぶかもしれません。

寺内くんの熱が頬から伝わり、もうすぐそこに顔があることがわかります。

初めては白井くんがいい。

そう願った瞬間でした。額に柔らかな感触が伝わり、私は思わず首を傾げてしまいます。

うつすら眼を開けると目の前に彼はいませんでした。

「それでまけとくよ。明日から準備に取りかかるから、学校休むなよ」

背中にその声が響き、振り返ると同時に扉は閉められました。その音を聞いて、私はその場に膝から崩れ落ちます。胸は高鳴ります。緊張は解け、思わず目が潤みます。

まさか口付けに唇以外の物があるとは思っていませんでした。

そして次の日の放課後、私と寺内くんが材料の買い出しを行いました。

疑似UFOの元となる物がまさかフリスビーとは思っていませんでした。どうやらこれに発光塗料という蓄光するペンキがあるらしく、それを塗るそうです。その塗料のお金も私が出したいと言いましたが、寺内くんは親が仕事で使っているから大丈夫だとおっしゃいました。しかし、それでは気が引けてしまうので、ここは引かずにホームセンターに行き購入を試みましたが、その値段に絶句。諭吉さんがバレーボールを行える人数は必要だと知り、失礼ながらも彼の厚意に甘えることにしたのでした。

その後、寺内くんの親の仕事場で（どういう仕事かはわかりませんが、小さな工場でした）フリスビーに発光塗料をひたすら塗り続ける作業を終え、彼とその親にお礼をして帰宅したのでした。

寺内くんは先日のキスの件があったからか、最初はぎこちない感じでありましたが、徐々に会話を交わすことで徐々に彼らしさを取り戻し、ほっとしたのでした。

家に帰り、姉さんの部屋を通った時に、ふと一昨日の小さな姉さんの友達を思い出し、ドアをノックしました。一昨日はアニメの放送時間でしたが、今日はそうではないので答えてくれるはずです。

しかし数秒時間を置いても扉は開きません。もしかすると寝ているのかもしれないので確認のため扉に耳を当て、物音がするか確認します。

ベースの重低音が響いているので音楽を聴いているはずですが……。

もしかしてこの一週間部屋から出てこないのは私と気まずい関係になっているからではなく急性の病を患っているのでは……。嫌な想像をし、けれど意外と的を射ているのではないかと思いつくと額から冷や汗が流れてきます。

こうしてはいられない気持ちで一杯になり、返事があるまで入ってこないでという約束を破り、扉を開けます。

「姉さん！」

勢い良く名を呼んでみたものの、部屋には姉さんの姿がありませんでした。

恐らく万年床となった敷き布団、炬燵とその上にあるデスクトップ型パソコン、そして漫画ばかりの本棚に菓子袋やペットボトルが転がった床。敷かれたカーペットにはダニが沢山いるに違いありません。それにほこりが充満していて鼻をくすぐられくしゃみをしてしまいます。

姉さんの部屋に入るのは中学生以来なので、その変わりように少し驚きます。あの頃は汚部屋ではなく、ほこりを探すことも難しいくらいに掃除がされていましたし、本棚には漫画はなく参考書や教材ばかりでした。これも学校に行かなくなった変化でしょうか。

見渡すとパソコンの電源が入っているらしく、洋楽のジャンルで言うところのロックなるものが聞こえてきます。そしてモニターに眼をやった瞬間でした。背後から「恵那！」と強い声で呼ばれ、驚き振り返ります。

姉さんはゆっくりと扉を閉め、こちらに歩み寄ってきます。町を歩く大怪獣のようなゆるりとした足取りで。

「すみません。あの……ノックをしたのですが、返事がなくて……」  
姉さんは今まで感じたことがないくらい怒りの気を身にまとい、獣のような形相で私を睨みつけます。私の声は届いているのか疑わしいけれど、話しを止めた瞬間に飛びかかってきそうなので、慌てて言葉を探します。

「もしかすると病気をしているのではと不安になって……」  
そう言った瞬間でした。姉さんがこちらに飛びかかってきました。言訳はもう聞きたくないと言った勢いです。

「ひゃっ」と思わず声を上げて眼をつむり、体を屈めてしまいます。伸びてきた手は私の頬を打たずに髪をさわり、そつと上下に撫でたのでした。暴力を覚悟していた私は訳がわからず、きょとんと口を開けて姉の顔を覗きました。すると瞳が潤んでいました。

「姉さん？」

「大丈夫よ。ごめんね、心配かけて。部屋を出なかったのは病気で  
はないの」

「では、どこに原因が？ 博物館のこと？」

「それは……少しあるね」

姉さんは言い辛いのか顔を歪め、口をすばみました。

「で、何でノックしたのよ」

そして強引に話を脱線させ、誤摩化そうとします。誤摩化す理由  
が気になりますが、まずこの問いに答えておきましょう。私にも訊  
きたいことがありますし。

「この間、姉さんの中学生時代の同級生に会いまして、どなたでし  
たか名を伺いたくて」

「ふーん」

姉さんは私が他人の話をすると途端に機嫌を損ね、言葉に力をな  
くします。

「小さくて威勢が良くて関西」「弁で喋りましたよ。と、最後ま  
で言う前に両肩を爪痕が出来るくらい強く掴まれ、言葉を遮ります。

「あんた明菜に会ったの？」

姉さんの口臭がすごくて思わず鼻を覆いたくなりますが、傷つき  
やすい姉さんにそのような態度を取ると、また一週間程部屋にこも  
る可能性があるのではここは我慢です。

「明菜さんと言うのですか。はい、会いました」

「何かされなかった？」

凄く神妙な面持ちで姉さんは訊ねます。この扱いだと明菜さんが  
犯罪者や詐欺師の類に思えてきます。

「特には」

「妙なことを吹き込まれなかったでしょうね？」

「いえ、相談を受けてもらっただけです」

そう言うと姉は膝から崩れ落ち、そのまま敷き布団に倒れ込みま  
した。そしてうずまりながら「あーあーあーあ」と小さなうめき声

を上げます。

「どうしました」

「どーもこーもないよ。あんな人のカスな部分の集合体の様な女の言葉を耳にすると耳が腐って、精神が朽ちるわよ」

酷い言われようです。何をすればここまで姉の嫌悪感を高められるのか見当が付きません。

「姉さんはどうして明菜さんをそこまで嫌うのでしょうか？」

明菜さんを悪い人だと認めない私に苛立っている姉は、舌打ちをしながら起き上がり、表情を強張らせてパソコンのマウスを握りました。

「これは明菜から回されている仕事よ」

モニターには画像編集ソフトが立ち上げられていて、ホテルのベッドルームの画像があり、姉さんはの左中央のライトがある辺りにマウスポインタを合わせました。クリックすると何やらモヤのみたいなものが表示されました。

「何ですか？ これは」

「霊よ」

姉さんはそんな非現実的なことを躊躇いも恥ずかしさを見せることもせず、さらりと言いのけました。

「冗談でしょう？」

「本当よ」

まさか姉さんは霊媒体質だから家から出られないと言っているのでしょうか。撮った写真に霊の霊を、加工ソフトで除霊を施す…いや、もしかすると私は多重人格ではなく、霊に取り憑かれています。そんな恐怖に震え、血の気を引いてしまいます。

姉さんの唇がゆっくりと動きます。

「大体わかった？ あいつはインチキ写真を私に作らせているのよ」「えっ？」

「わかってないか。ちゃんと説明するわ。明菜は写真屋をやっている、五人に一人くらいだけど現像した写真を一枚抜き取るわけ。で、

その抜き取った写真に私が霊や変な動物や

UFOを貼付けて、後日その人に一枚入れ忘れていました、と連絡して客に返し、そう言えば最近この辺りで変なものを見たという話が多いんです的な話をして、一枚の写真じゃ説得力ないから、さらに何枚か偽写真を用意して信憑性を高めるわけ」

「何故明菜さんはそのようなことを？」

「中にはそういう写真を撮りたくて仕方のない連中がいて、そういったら来てもらう為に、この写真屋で現像してもらったら何か写るかもしれないというジंकスのものを作るためよ。で、明菜は上手いこと言って割高で現像するわけ」

「それはなんともけつたいな詐欺ですね」

「こんなのまだほんの一部よ」

姉さんは舌打ちをして、ずらずらと彼女の悪行を口にしていきました。

小学生にチビと罵られ注意をしても聞かなかったので、その子の小学校の修学旅行に付いて行くカメラマンに無理矢理なって、現地でその小学生の写真を一枚も撮らないと言った何とも反応し辛いものから、女子高生の写真を撮りネットで売るといって私にとって身近な危険、そしてここでは言えない様な黒い仕事まで様々でした。

聞き終わる頃には明菜さんに対する私の評価はツバメの低空飛行くらい下がっていました。

「これが明菜よ。わかった？」

姉御肌が心地よく、いい相談相手になってくれたと思っていたのですが、姉さんの話を聞いてからだ、あの助言は違う意味を持っているように感じます。

相手が喜ぶ嘘なら悪ではない。しかしそれ相応の覚悟が必要。

まるで自分に言い聞かせているようです。

ですが一つわからないことがあります。

「そこまで軽蔑している人の頼み事を何故引き受けるのですか？」  
訊ねると姉さんは何も言わずにいきなり頭を床に付け、土下座を

しました。

「ごめん。私が妙な心配をしなかったら明菜が恵那を知ることにはなかったの」

「どういうことですか？」

姉さんは頭だけを上げて私の眼を見つめます。

「恵那の様子がおかしくなって、それが怖くなって狐とか犬とかに憑かれてるんじゃないかって」

姉さんはとうもろこしが材料の物を好むようになり、朝食時にもつもと違う様の私をおかしく思い明菜さんに相談したそうです。彼女が心理学や民俗学にも学があり、探偵のようなことも行っていることを知ったそうです。

「恵那のことを調べる代償でこの仕事を引き受けたの」

どうやら私が二人いることで様々な人に、様々な迷惑を与えているようです。これはもう放っておける心境ではありません。私かもう一人の私、どちらかにこの体を与えなくてはなりません。そしてそれは明日決意できるでしょう。

「いえ、姉さんの心配は最もです。こちらこそ迷惑をおかけしました」

疑似UFO作戦のあとに。

「くっそお、全然駄目だ！」

冷たい日本海の風が肌を切り刻むように強く吹き荒れ、目の前が真っ白な程に降り散る雪。そうはちばんの山に寺内くんの叫びは響かず風音にかき消されます。天気は最悪。そんな山の中でフリスビーを放りますが、風と雪が疑似UFOを墜落せんとばかりに吹き付け、五メートルも飛ばずに山の森の中へ消えていきます。

日が暮れた中、木に引つかかる光ったフリスビーはクリスマスツリーのようで皮肉にも少し美しく思えます。時計を見ると約束の時間まで五分を切っています。フリスビーはUFOのように舞う気



開始時刻前に倒れてしまうなんて……寺内くんはきつと看病をしてくれたので白井くんの弟にUFOを見せることはできなかったのでしょう。手伝うつもりが、これではただの邪魔者です。

しよげて首をもたげる私に対し、白井くんは口を開きました。

「ありがとうございます」

「あつ、いえ。お礼をされるなんて」

どうやら白井くんは私が二度目の疑似UFOを飛来させる件について知っているようです。眠っているうちに色々寺内くんから話を聞いたのかもしれませんが、けれど、私は失敗してしまったのだから、感謝などされる筋合いはありません。いえ、弟さんを騙そうとしたのだから責められるの筋と言うものです。しかし白井くんは……。

「本当に感謝している。弟は大興奮だったよ」

笑っていました。私の冷えた心を温める程に。

「いきなり山から大きな光が出たってな、雷みたいに」

「でもそれはUFOではないのでは？」

「あいつはUFOだって信じている。ちゃんと異星人が予告をしにきたからな」

そして白井くんはぼそつと言いました。これであいつは外の世界に興味を持ってくれたと。

白井くんが喜んでくれたことはこの上ない幸せですが、ひとつ訂正しなければならぬことがあります。

「でも、それは私が行ったのではないでしょう？」

「いや、お前だ」

「いえ、もう一人の」

言いかけた私の言葉を遮り、白井くんは少し影のある笑顔を見せかぶせてきます。

「羽田は羽田だ。誰もいない」

それはまるで自分に言い聞かせる様な言い草でした。

きつと白井くんはもう一人の私を忘れる準備を、私よりも少し早

く始めていたのでしょうか。ならば私も始めなくてはなりません。大きな劣等感を消す為に。

「白井くん。色々とありがとうございました」

私の言葉に少し驚いた表情を見せましたが、小さな声で「おう」と答え、少し微笑む彼の横顔を見て、この瞬間を一生忘れないと誓うのでした。

三日後に退院してから、学園生活に大きな変化はありませんでした。少しの変化と言えば、白井くんは異星人と名乗ることを辞め、私は少し肩の力を抜いて日々を過ごしたくらいです。それによって、私も白井くんも、少しだけ笑顔が増え、少しだけ他人との距離を縮められ、少しだけ明日を待ち遠しく思い、昨日を寂しく思えるようになったと感じます。

けれど二人の距離に進展はなく、会話は挨拶程度。特別なことをしたとすれば、それはこの交換日記でしょうか。これを交換日記と呼んでよいものかわかりませんが、私はもう一人の彼女のことが気になり、白井くんに頼み、あの出来事を遡ってノートに書き記し合う事を決めたのです。

そして最後の部分を書いたまま白井くんに渡すことを忘れ卒業式を終えたのでした。

それは、どうしてでしょうか。もしかすると卒業後に会う口実を作ろうために無意識がそのような働きを行ったのかもしれませんが。

## エピソード

恵那と優が高校を卒業して四年が過ぎた春。公園の木々には桜の花がちらほら咲き始め、穏やかな陽射しが降り注ぎ、緩やかな風を運ぶ午後。

成人式に帰郷して以来、久々に恵那はUFOの町に帰ってきた。府内の国立大学を卒業した彼女は地元で就職を決めて、今日からこの町で一人暮らしを始める。

駅を出てから彼女は真つ直ぐ実家に帰ることはせず、逆の方向に歩みを向けた。

二年ぶりに歩く町並みは変わりがなく恵那は懐かしく思う。UFO型の電灯、パチンコ屋の天井にあるUFOの模型、そして商店街に並ぶ店ののぼりには無理矢理感UFOとのコラボレーションされた商品名が書かれている。ラーメン、カレーパン、うどん、丼、花などバリエーションに富んでいる。けれど、それでも所々はシャッターが閉められていて、見かける度に胸が痛む。

そして恵那はボロい、前向きな表現をすればレトロな写真屋の扉を開けた。

「いらつしゃい」

するとオーバーオールを着た小柄すぎる女性の店員が関西弁で迎えた。

「相変わらず可愛いですね」

恵那は屈託のない笑顔で店員を褒めるが、明菜は喜ばすに不貞腐れ、唇を突き出す。

「それは身長か、うちの顔、どっちのことや」

「両方です」

さらっとそんな言いにくい言葉を発する恵那に明菜は苛立を覚える。

「くっそ。腹立つわ。カウンターなかつたら蹴ってるのに」

カウンターに頬杖をつき、明菜は恵那を睨む。

「久しぶりやの。で、何の用？」

「ええ、今日からこの町で一人暮らしを始めることになりました」

「ほう。どっかのアホは四捨五入で三十路やのにまだ引きこもってるのにな」

「そうですね」

頷きながら恵那は頭に姉の姿を思い浮かべる。

「えらいえらい」

「だから最初に会っておきたい人がいまして」

明菜は鼻で笑う。けれどそれは恵那を馬鹿にしたのではなく、懐かしい出来事を思い出したからだ。それに加え、彼の間が悪さも一因したのだろう。

「すまん、最初が私になってもうて」

「いえ、連絡もせず訪れた私が悪いのです」

「異星人やったらラーメン喰ってんで、休憩やかな」

「ありがとうございます」

用件を済ますとすぐに店を出て行く恵那を目で追って、明菜は呟いた。

「まだ好きなんや」

恵那は商店街に一件だけになったラーメン屋を訪れた。にぼしのかおりが強く、腹の音が鳴りそうになって腹を手で押さえる。

さっきの写真屋とは違い威勢のいい挨拶で迎える店長にしょうゆらーめんと告げ、カウンター席に座るぼさぼさ頭の男性を見て、恵那はその隣の席に着いた。

そして彼の顔を覗く。麺をすすり、湯気が鼻に入り鼻水が少し垂れる彼の顔を見て、恵那は体が熱くなり、頬が紅くなっていくことを感じた。

そして彼が箸を置いた瞬間に声をかけた。

「あなたは異星人ですか？」

男はラーメンを見つめて言う。

「違う」

そして恵那の顔見て言った。

「そうだろう、元異星人」

その男、優が照れくさそうに笑うので、つられて恵那も笑ってしまふ。もう異星人なんて真顔で言える年ではないのだ。けれど、それを悲しいとは思わない。

「久しぶりだな。話したのはもういつだか覚えてないな」

「うん。白井くん成人式は来なかったよね」

「寝ていた」

「そうなの？ 織絵さんが見たがっていたよ」

「それは好奇心だろ」

「そうかも。そうそう、今年の五月に結婚するみたい」

「おめでとくと伝えてくれ」

「うん。それで久しぶりに交換日記読んでいて思い出したのだけれど、寺内くんはどうしているの？」

「この春から親の工場を継ぐんだと」

「そうなんだ。明菜さんの仕事の手伝いはどう？」

「どうと言われてもな。一言で言えば刺激的だ」

「なんとなく伝わるよ」

恵那は水を口に含み、深く息を吸う。

「弟くんはどう？」

「ああ、ちゃんと通学している。運動は少し苦手だがな。お前に会いたいと言っていた」

「それは私ではなくて違う私でしょ」

「違う。ちゃんと羽田だ」

「それは嬉しいな」

「お待ちどうさま」と声を張って店主はラーメンを恵那の前に置いた。恵那は「いただきます」と微笑む。

優がどのようなラーメンを頼んだのか気になり井に恵那は目をやる。麺とスープは同じだが、具が少し違った。UFOの絵が入った

なることがある。

「かわいいね、それ」

「ああ、UFOラーメンだ」

「なると入ったただけだよね」

「それでもUFOはUFO。この町らしいだろ」

「だね」

優は箸を置き、鼻をかんだ。

「で、この町からいつ出てくんのだ？」

「いけないよ」

「うん？　ということとは？」

「そう。今日からこの町で一人暮らし」

「勤め先は？」

「宇宙博物館の職員」

恵那が言つと優は腹を抱えて笑った。それはすごいと。恵那もつられて小さく笑う。

「おめでとう」

笑いが落ちつくくと優はそう言つて恵那の井にUFOの絵柄が入つたなるとを入れた。

「ありがとう」

「またよろしくな」

その言葉と優の笑う横顔を見た瞬間、恵那はあの頃に戻れた気がした。

蒲鉾なんかを貰い純粹に喜ぶ恵那を見て、優はあの頃に戻れた気がした。

無意識に二人は思う。彼が彼女とは違うもう一人の彼女を好きでいた時にあつた笑顔に似ていたからだろうか、と。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3110s/>

---

嘘と不思議とオブジェクト

2011年4月8日01時40分発行